
空を見上げて歩いてこう

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を見上げて歩いてこう

【Nコード】

N9458R

【作者名】

猫海月

【あらすじ】

「そのときに選ばせてあげる。私と一緒に生きるか、それとも私を殺してあなたも死ぬか」

「ふーん…それじゃそのときが来る前に答えてあげる。私はあなたを殺す」

「…楽しみにしてるよ」

こんな内容だったりそうじゃなかったり！

一人の少女と一人の女性が旅してる話です

まいどの如く基本ほのぼの日常たまたに殺伐ですご注意を

そしていつもの如くタイトルは結構適当

食人植物なんか居たら即効で絶滅されてそうですよね(前書き)

やあ、刺胞動物だよ

少し前に続編らしきものが出てたけどアレはなかったことになったんだ

楽しみにしてた人が居たらごめんね

作者の都合で続けられるのは1つだけなので今度こそ新作だよ！
適当にお付き合いください

あ、基本タイトルは関係ないです

人物表

ソラ

旅人 魔法使い？ 和服にコート ポニテ 青みの掛かった銀髪

奈々

旅人 剣士？ 黒髪ロング ワンピース的な感じで

あらすじ適当に書いてたらお友達に怒られた・・・

食人植物なんか居たら即効で絶滅されてそうですよね

「んにゃう…?」

私がトコトコトコトコと森の中を歩いていると、奈々が目を覚ました。うむ…もう少し寝顔を見ていたかったんですが…シカタナアイネ。

「はろう、ぐつもーにんぐ?」

「ん、おはよー…」

どうやら起きたばかりで寝ぼけてるご様子で、奈々はきよろきよると辺りを不思議そうに見渡している。よろしい！疑問があるなら時に魔術師といわれたことがあるようなような私がズバツとビシツと解決してあげましょう！

「どうかした?」

ということではきちんと歩みを止めてから解決に向けての第一歩を踏み出すことに全力をだす！誰だろうと疑問を知らなければ解決することは出来ないもんね！

「…なんで動いてるの?」

「さあ?何でだろうねー?」

…ふっ、どうやら私に彼女の疑問を解決することは出来ないみたいね。

ということと腕の中の奈々の位置を少し調整してから、またトコトコと歩みを進めることに。

「ねえソラ？」

「…なーに？」

「…なんで動いてるの？」

「奈々、よく聞ききなさい？そんな細かいことを気にしては強く生きれませんよ？」

「いいからさっさと離せー！」

「暴れると危ないって！」

「そう思うなら離せー！」

「ふっ…悪いがそれは出来ないな…」

私は腕の中で暴れている奈々を落とさないようにしっかりとホール
ト！

たとえこの身が朽ちようとも…この手は離さない！お姫様抱っこ
…一度やってみたかったんだよね！。

…意外と腰に来るね、コレ。

「満足するまでは決して離すことはない新発想運送術！」

「お姫様抱っここの何処が運送術だ！いいから離せー！」

「離すことは出来ないけど別のものは出来たり」

「そんなこといいからはな…んんっ!？」

あまりにも腕の中でギヤーギヤー五月蠅く騒いで、暴れるのでキ
スで口を塞ぐことにする。うむ、やわいのう。

「な、なななななな、なななななな」

「よしよし、それじゃ降ろしてあげようか」

起きてしまったのならしょうがないので、真っ赤な顔をしながら
『な』を連呼してる奈々を降ろしてあげる。奈々が『な』を連呼…

か。それにしても本当は離したくないのに妥協して離す私っておつとなー！

いやその…ね？暴れられると腰に来るのだよ、腰に。…人はこういう形で大人の階段を上って行くんだね。

私が痛む腰をさすっている、奈々が大剣を私へと向けてきた。

うーむ…こっ、奈々くらいの子が持つと大剣がさらに大きく見えるね！

「な…何すんだー！」

「何って…ちゅー？」

はて？他に言い方あったっけ？マウスとユーマウス？ああ、人工呼吸ってのがあったね…でもあれって生命維持だよな？

ちよつと待ちなさい！切っ先！切っ先が刺さるから！あんまし震えると私の胸に傷が付くから！

「うー！ソラのバカー！」

私がぶるぶる震える切っ先に戦々恐々としてみると、奈々は大剣片手にぶりぷりと歩き始めた。

「あんまし先に行くといけないぞー？」

「五月蠅い！ソラのバカー！」

「…あのー、奈々様？もしかしたら怒っていらっしやいますか？」

「ソラのバカー！」

うっむ…よくわからないけれども奈々はお怒りのご様子。コレは拙い！どうにかして怒りを静めないと私の晩御飯がピンチじゃないか！

…何がいけなかったんだろうね？おはよのキスが遅かったとか？

「わわっ」

割と真面目に機嫌を直して貰う方法を考えていると、何かに足を引っ掛けられた。誰だ私の足を掴む輩は！今は大変な時期なんだぞ！主に私の晩御飯とかが！

怒りをあらわに足元を見れば何かのツタのようなものが絡まっている様子。コレはアレだね。食虫植物の大きい版！つまり：食人植物？わお、私：捕食対象に選ばれたってわけ？

そうこうしてる間にツタは伸びるに伸びて私の体へと巻きつくと、何処かへ引っ張っていくではないか。

「奈ター！こっち向いてー！」

「五月蠅い！」

「奈々ちゃん？こっち向いてくれたらキスしてあげるからー」

「そんなの要らない！」

「今なら飴ちゃんも付けてあげるぞー？」

「ソラのバカ！」

何度か奈々に呼びかけてみるけれども助けは絶望的だねえ。ん？この状況…もしかすると！

「どなどなどーなーどーなー」

チャンスとばかりにポツリと呟いてみる。ってそんなことしてる暇ないし！今はこの触手から何とか脱出ないと、晩御飯のつもりが私が晩御飯になってしまう！

あ、待って！お面が…私のお面が落ちたから拾わせて！

私の懇願むなしくぴくりとも動かない触手たち。このままじゃ、

札にも銃にも手が届かないし魔法は近すぎてヤバイ、つまり私何も出来ないジャン！

一応コートのおかげで締め付けられても特に痛く無いのが幸いだけれど、食べられたらコートも何もないしねえ。まさか普通の魔法の勉強をサボっていたツケがここに来て来るとは！誰が予想しただろうか！？

しょうがない…ここは四肢の1つや2つは犠牲にして逃げることにするかな？なあに、命よりは安い安い。

私…もしも生きて帰れたら真面目に魔法の勉強するんだ…。

私がいかにしてこの状況から抜け出そうか考えていると、突然ツタが動かなくなった。むむ？コレは私の祈りが通じたのかな？

どうやら違うみたいでツタに糸みたいなのが絡みついて動きを止めてる様子。私に絡みついたツタが糸に絡みつかられるか…。

「ソラっ！」

動きが止まるとすかさず森の奥から奈々が大剣を片手に駆けてきた。ピンチに駆け寄るとは！ヒーロー要素あるね！いつか私もあんなふうに演出してみたいね！。

「奈々！私は信じてたよ！」

「いいから黙って！」

お決まりの台詞を言ってみるけれども予想外の返答。うむ？どうもテンパってるみたいだけど何かあるのかねえ？

「…わお」

後ろを見れば大きなお口とご対面。つまりあと少し遅かったらこ

のままぱっくり晩御飯となつたわけと…いやー危なかつた危なかつた。

だけどどれだけ近かろうが植物は植物。悲しいけれど…私、それ以上近づけないのよね。まだ動けないし。

そうこうしてる間に私は奈々によって助けられ…いたひ。

「奈々…？ツタを切つて助けるのはいいけれど、出来ればつかまつてる人のことも考えた救出法にして欲しいなー？」

私は地面へと這い蹲りながら、食人植物に止めを刺している奈々の方を見上げる。悪いな！魔法の勉強をするって言ったがアレは嘘だ！

「まあ何にしてもありがと」

立ち上がって伸びを一つすると、奈々にお礼を言つて頭をなでなで。やっぱり五体満足ってすばらしい！

「…さつさと行くよ」

…あるえー？

「まだ怒つていらっしやいますか？」

「…怒つてない」

聞いてみると私から顔を背けながらポツリと言つ奈々。わー…コレは怒つてる。さてさて…何ゆえ彼女は怒つていらっしやるのでしょうか？

「もしかして心配をかけたからとか！？」

「心配なんてしてない！」
「おう……」

真つ赤な顔で叫ぶ奈々に少し気圧される私。どうやら心配をかけたことについて怒っているようではないらしい。…となると、おお！なるほど！つまりご褒美が貰えないから怒ってると！ふっ…私に掛ければこの程度、聞く必要もない！

そうとなれば飴玉を取り出して彼女の名前を呼ぶ。

「奈ーター」

「…何よ」

「はい、ご褒美」

「んぐっ！？」

私は手に持った飴玉を口に含んでから、奈々へとキス。そして少し舌の上でコロコロと転がしてから飴玉を奈々の元へとどなどな。

「ん…」

奈々は顔を赤くしながら目を白黒、手をばたばたさせていたけれど、やがておとなしくなると飴玉を口に含んだ。よし！みっしょんこんぷりーと！

「ソ…」

「んにっ？」

奈々にあげてたら自分も欲しくなったので、自分用の飴玉を選んでいると、奈々が何やら咳いている。

「ソラのバカー！」

「バカとは何よ、バカとは」

何と！奈々は真つ赤な顔でそう叫ぶとまたずんずんと先に進んでいくではないか！？

「あんまし先に行くとか危ないぞー？」

「五月蠅い！ソラのバカ！」

「…あのー、奈々様？もしかしたら怒っていらっしやいますか？」
「ソラのバカ！」

うむう…何が悪かったのか…レモン味嫌いだったっけ？確か前に聞いたときは好きだって聞いたんだけどね？

「奈々ー？そんな急ぐとお姉さん付いてけないー」

「五月蠅い！もう知らない！」

「キスしてあげるからー」

「…」

おお、効果あり。

「…不意打ちじゃなくちゃんとしてくれるなら許す」

「あいあい」

「ん…」

私はゆっくりと目を閉じる奈々にキスをすると二人で歩き始める。
さてさて、晩御飯は何かなー？

食人植物なんか居たら即効で絶滅されてそうですよね（後書き）

友人「甘いのが読みたいです」

私「どうしてこうなった！」

ということで作新です

はじさよの続編なんてなかったんや！

手探り進行となるので不定期更新となりました

あらかじめご了承ください

ではここまでお付き合いいただきありがとうございます

勇者って魔王退治した後何してるんでしょっかね？（前書き）

武器を農具に変えて畑耕していたらそれはソレデ素敵！

第一話とノリが違ったりします

基本ひらめきなのでその辺は適当なのらー

ということまで人物表

人物表

ソラ

旅人 魔法使い？ 主に荷物持ったり色々

奈々

旅人 剣士？ 勇者好きー

勇者様ご一行

魔王を倒すために奮闘中 名前はまだない おそらく今後もない

勇者って魔王退治した後何してるんでしょっね？

「ん？勇者？」

「そう勇者！」

私が少し遅れた朝食のセットをもぐもぐとやっていると、奈々が興奮した様子で近づいてきた。勇者…ねー？

「で？その勇者が？どうしたの？」

「知らないの！？この街に勇者が居るんだよ！」

「へー、そうなのー」

ランチという名の朝食についてきたパンでも齧りながら話半分で聞いてみる。ちなみに私がここで朝食を食べているのは決して寝坊したわけではない！断じてない！ただし悪魔とのバトルが長引いただけなのだ！

「今日の朝に宿屋のおじさんが言ってたら間違いないもん！」

らんらんと目を輝かせながら私に語る奈々。それをスープとパンで適当に聞き流している私。若いつていいわねえ…。

それにしても朝早くから動いてると思ったらそんなことしてたのねー。

何であろうと彼女の勇者談に付き合っただけ入られない！いや、特に予定があるわけじゃないけれど…勇者って見るからに危険そうな雰囲気かぶんぶんしてるじゃない？

そもそもあの連中ちゃんと水浴びしてるの？そういう話を一切聞かないのだけだ。

「でねでね!…ちょっと!聞いているの!?!」
「うんうん、聞いている聞いている」

ああ…緑茶とか出ないのかな?一番安いメニューだからしょうがないか。

「まあ、枯れてるソラにはわかんないだろうけどー」
「おいましてそのちっこいの。誰が枯れてるって?」

それは聞き捨てならないぞ!まだ私は枯れてるといわれるほど歳取ってない!

「誰が小さいって!?!」
「私は枯れてない!」

叫びながら二人でにらみ合う一触即発の現状。いまいち片手に持つるパンのせいで緊張感が出ないのが残念。

でも待つて欲しい。私は優雅にパクパクとパンとスープのみの朝食^{ンチ}を取っているときにケンカを売られたのだ!食事を中断するわけには行かないし、さりとてこのまま黙つていては私が枯れていることにされる!その状況であるならばパン片手ににらみ合つても仕方ないじゃない!?

ちなみにパンスープセットは店の中で一番安かった。一番高いのは何だかよくわからん龍鍋。誰が食べるんだあんなもの…。
何はともあれ絶対に譲れない戦いがここにはある!?

「ソラのバカ!」
「ごめんなさい謝るから武器を構えないでください」

武器を出した瞬間高速で土下座する。周りの視線が痛いけれども平穩には変えられない。

「しょうがない…許してあげよー」

「ハハハ」

どうやら許して貰えたので再び食事に戻ることにする。食事時間が長いのはことあるごとに奈々が絡んでくるのが原因。

「で？その勇者がどうしたの？」

私の膝の上に乗ってパンへと伸びていく手をさりげなくガードしつつも話を掘り返す。放っておくとテーブルには暇をもてあました彼女の作品があふれてしまう。パンちぎって出来た顔とか、顔とか、顔とか。

「うむうむ！何でも私たちの泊まってる宿に居るらしいの！それでね…「ダメよ嫌よ行かない」「

「まだ何も言ってない！」

「…なーに？」

「勇者様に会いたい！」

「絶対いや！」

「えーなんでー何でー！」

私の目の前でぶくーと頬を膨らませる奈々。おのれ勇者め…姿かたちすらも知らない癖に奈々をたぶらかしおって…様付けとかお姉さん絶対に許しませんからね！

絶対に譲れない戦いがここには…

「ご機嫌な奈々の手を持って勇者の部屋へと向かう。

「うれしい？」

「うん！」

聞いてみるとこぼれるような笑顔。私は寂しいよ。そんなに勇者に会うのが嬉しいか…。

ちなみに部屋はご主人に聞いたら快く教えてくれた。ここに来たときといい、いいのが勇者よ、情報駄々漏れしてるぞ。そんなんだから魔王に刺客とか送られるんだ！堂々としてないでもっと忍べ！シクシク。

そんなこんなでまだ顔も見ない勇者に恨みの念を送っていると部屋へと着いた。

「…」

「…」

扉の前で固まる二人。ねえ、この状況かなり拙くない？他人に見られたら怪しすぎるでしょう。

「開けないの？」

「う…ん…」

聞いてみるも顔を伏せたままでドアノブを睨みつけるのみ。睨んであいたら魔法の呪文は必要ない！それにしてもどうしたんだろう？あかないとかかなー？

「開かないの？」

「そういうわけじゃ…ないと思っ…」

どうやら開かない訳ではないらしい。私が見た感じ結界が張られてる訳でもないし…鍵が掛かってなきや開くと思っただけだねー？
そうか！魔法の言葉を言うのが恥ずかしいのか！？

よし！ここは昔魔法使いと言われたことがあったような無かったような私が唱えて見せよう！

「開け！」…ふお…」

最後まで言うことが出来ずに悶絶する私。奈々さん…何故私のお腹を叩くのでしょうか…。食後にそれは割と洒落にならないですぞ。

「少し、黙って」

「はい…」

蹲まって戻り戻されの大激闘をしながら、ドアノブを睨んだままの奈々へとかろうじて返事をする。

そして奈々のにらみが利いたのか、それとも私の渾身の呪文が届いたのか。今まで開かずのドアはガチャリと音を立てて開かれた。

「…何だ？あんたら？」

ドアの先では剣を腰に刺した男の人が私たちの方を訝しげに見ていた。ワイルドチックな容姿…うん、記憶に違いが無ければどこぞの王子様だね。王子らしくなかったから印象に残ってる。それにしてもお姫様はどうしたのかねー？

「…」
「…」

今の状況を整理しよう。

剣を持っている彼が扉を開けた。

扉の前では少女が二人。今の表現で文句ある奴は表に出る。

一人は固まっておりもう一人はお腹を押さえて蹲っている。

結論。

…かなり拙くない？

「初めまして、私はソラ。こっちのこの子は奈々。勇者がここに居るって聞いてこの子が一目みたいというので来たのですがご迷惑だったようですね」

こうなれば三十六計逃げるにあらず。

私はそこまで一息に話すと奈々の手を引いてそこから抜け出そうとした。

「何だそういうことか…おい、お前に客だつてよ」

…したが、何かを確信したのか何を考えているのか招き入れてくれるらしい。うわー、はいたりたくなーい。

とりあえず招き入れてくれるなら腰の剣を外して欲しい。見た感じではこっちは非武装なんだから！

「剣は勘弁してくれ。何かと物騒なんでな」

すると私の視線を感じたのか、彼は笑顔で振り向きながらそう言った。

「そ、それは仕方ないですわね」

おほほほほほー、とその場を乗り切ることにする。

「たぶんお目当ての奴は向こうの部屋に居ると思っから……」

「ほら、奈々！会いたがってたんでしょ！」

「う…うん…」

カチンコチンに固まってる奈々の背を叩いて促す。

「ソラ…?」

「んー?」

「一緒に…来てくれないの…?」

なにやら私のコートの端を掴みながら上目遣いで聞いてくる。いや…その…ね？それは反則でしょう?」

「行きたいのは山々だけれど、私はこっちで待ってることにするわ」

奈々の方を見ないようにしながら告げる。

「…そっか」

それを聞くと悲しそうに顔を伏せる奈々。…耐えろ！耐えるのよ私！

「ええ、だから行ってらっしゃい？帰るときはちゃんと合図するか

「ら

「うん…」

そして奈々は心配そうに私の方を何度か見ながら隣の部屋へと入っていった。楽しんでおいでー。

「一緒に行かなくていいのか？」
「私勇者って嫌いなよ。それにあの子なら大丈夫でしょう」
「そうか、コーヒーでいいな？」
「ええ」

出来れば緑茶がいいのだけれど贅沢は言えない。
しばらくすると目の前にコーヒーが出てきて、隣の部屋でなにやら雑談している声が聞こえてきた。…楽しそうね、奈々。
それにしても勇者って言われてても観察力が足りないわねえ？

「…それで？」
「…それでは何でしょう？」

睨んでくる彼の視線を避けてコーヒーをごくろり…苦い。前言撤回。
やっぱり勇者だ、人以外に敏感すぎる。

「いったい何のようなんだ？」
「だからあの子が勇者に会いたいというから…」
「ホントにそれだけならいいんだがな…」

私の方を睨みながら彼もコーヒーを飲む。さっきから座らないし、完全に警戒されてるね私たち。
…そりゃ信じて貰えないよねー。私だって私に会いたってバカが来たら警戒するわ。それにしてもホントにそれだけなんだから仕方ない。ん？待てよ？バカ…？

「失礼ね！私はバカじゃないわよ！」
「っ！？」
「いや…その…何でもないです」

おほほほほほ、と笑いながら懐をがさごそ。

「待て、変な真似をしたら斬るぞ」

「…わかったから剣から手を離してくれる？」

私はそういいながらゆつくりと飴玉を懐から出す。…この人怖いよ。だから勇者なんて会いたくなかったんだ…。

「口に含むのはオーケー？」

「…ゆつくりとな」

オーケーらしい。それにしても飴玉一つで何ゆえそこまで警戒されなくちゃならないのか。

そのままコロコロと転すこと数分間、どうやら警戒は終わったのか剣から手を離してくれた。口直して飴玉食べるのにここまで緊張したのは初めてよ…

隣では割と盛り上がっている様子。うらやましい…

「窓を開けてもいい？」

「ああ」

どうやら少しだけ警戒が解けられた様で窓を開けるのは許可されたので開けることにする。私が変なことしたらホントに斬る気だよこの人…そんなんじゃないか？一発ギャグも出来ないじゃない。命を懸けた一発ギャグ…少しいいかも！？

「ねえ…」

「何だ？」

「隣に居るのって一人じゃないよね？」

「…よく気づいたな」

よく気づいたなって隠しながらかなり魔力貯めてるじゃない。そりゃ誰でも気づくわ。

これ以上は危険と判断したので懐に手を伸ばす。

「時間も時間だからもうお暇することにするわ」

そう告げた瞬間に札に込めてた魔力を発動させる。すると轟音と閃光が私を包んだ。ちょ…まぶしい！加減間違った！？

なんにしてもこのままだと拙いの外へとダイブ。着地と同時にもう一枚の強化符を発動。明日へ向かってダッシュ！

周りの視線が痛いけれど気にしない。今は自由が惜しいのだ。

さらば勇者よ。出来ればもう二度と会いたくない。

どうしてこうなったの…。

現在位置は何処かの路地裏。誰かさんちの窓にぶら下がっている状態。

着地してダッシュ！まではよかった、問題があるとしたら着地の瞬間に足を挫いた事と誰かさんちの窓にぶらさがった時に強化符のが切れたことの二つ。つまりかなり拙い。

このまま着地すれば私の足にすさまじい痛みが襲うだろうし、それは痛いし避けたい。

かといって片手を離せば一気に落ちかねない所したら結果は落ちたときと一緒！バランス崩してる分かなり悪いかも。

つまり私にいったいどうしろと…？

まあこうしてぶら下がってればいすれ奈々辺りが来てくれるでしょう。来てくれるよね？信じてるからね？

「…ところであんた何してるの？」

「奈々！いいところに来たね！ちよつと降りれなくなって助けて欲しいんだけど…」

「ナイスタイミング！無事再会できて私嬉しい！」

「えー…」

「しかしどうやら奈々はご機嫌斜めの様子。何故！？」

「えつと…勇者さんとはお話できた？」

「こついつときは世間話をするに限る！」

「誰かさんのせいで途中で終わった」

「そ、そうなの…」

拙い、コレは拙いぞ私！そろそろ手が痺れてきた…。

「まあそれはいいけど…私が助けなくても飛び降ればいいんじゃない？」

「ちよつと諸事情でそれが出来ないの！」

「へえ…？」

「…晩御飯豪勢にしようか」

「うん、助けるのはいいけど、どうやって？」

「…えつとー？」

私は今窓にぶら下がっている。

窓には私一人しかぶらさがれない。

奈々は下に居て私を見上げている。

受け止めて貰うにしても私は縦にしか飛び降りることは出来ない。
あるえー…？もしかして積んでる？

「…こつ手を離れた瞬間に私を抱きかかえるみたいなことは？」

「狭くなければ出来そうだけど、それは無理そー」

積んでるね。

しょうがない…ここは覚悟を決めて飛び降りるしかないか…。

1 2の3で飛び降りようとした私のら頭上で窓の開くことがした。

「…あんたらいったい何してるんだい？」

窓の方を見れば叔母さんが目を丸くしながらこつちを見ていた。

「えー…明日に向けて走り始めてたらここから降りられなくなりまして…」

「はっはっは、そりゃ大変だ！今、助けてあげるからね」

おばさんはそういつて笑うと私を引き上げるとさらに治療とお茶までごちそうしてくれた。なんていい人なんだろうか！

おばさんにお別れを告げてからは日も暮れたので晩御飯タイム。
悲しいながら晩御飯は豪勢にするという約束をしまったので
朝食を食べたところで食事を取っている次第。

「お？奈々じゃん」

私と奈々が龍鍋とかいう意味不明の料理をばくついていると、突然そんな声が聞こえてきた。それにしても値段と味がつりあわない料理だねえ。

「あ、勇者さんだ」

溢れんばかりの笑顔で答える奈々。奈々よ…そんなに勇者が好きか。お姉さん寂しいぞ。

「よかつたら一緒に食べる？」

奈々よ…それは勘弁して欲しい。お姉ちゃん泣いちゃう。

「お、いいのか？それじゃ遠慮なく」

勇者空気読め、少しは遠慮して。

がたごとと席に座ってきた名前は忘れた勇者こと男性は、ぱっと見柔らかな好青年でお人よしのお兄ちゃんって感じ。まあ…ぱっと見だからどうかは知らないけれど。

でも待てよ…？勇者が居るってことはつまり…？

「よう、昼間は悪かったな」

出たな警戒男。さわやかな笑顔で近づくな。隣に座るな。剣は隠せ。

「ん？お前ら何かあったのか？」

「ああ、ちよつとな…」

「ええ、ちよつと…」

「ふーん」

「どうやら勇者こと好青年は私の話には興味が無いのかそれとも気にしない性格なのか、奈々に旅で起きたいろいろなことを身振り手振りで語っている。奈々…そういう笑顔を少しでも私に見せて。」

「そして奈々と一緒に無言のままニコニコと彼の話を聞いている白ローブの女の人。昼間と違って魔力は貯めてないみたいだし、奈々に対する警戒は解いてくれたのかな？」

「それにしてもあなたたちっていつもそんな装備なの？」

「見れば三人が三人とも、服はそれなりに楽そうでも武器は持ったまま何だから大変よね…？」

「俺たちにも色々あるんだよ。尤も、いつも荷物を抱えているあなたに言われたくは無いが…」

「失礼な。私のは夜逃げ用だ。普通の荷物はちゃんと宿屋に置いてある。」

「魔法で収納してもいいのだけれど、最近は手ぶらで来たりするとかなり警戒されるのよね…おかげで入るときと出るときとは荷物を見える場所で持たないといけないからかなり面倒。」

「そついえば奈々はどこまで行くんだ？」

「ん、ん…」

「勇者に聞かれた奈々が困ったようにこちらを見た。何処まで…ねえ？次は何処に行こうかしらね？」

「とりあえず北で。」

「アイコンタクトのおかげで目だけで会話！そんな便利なこと私たちもしたいわねえ…。」

「とりあえず北かな？」

「そうか北かー。あそこはいいぞー。何より飯が旨い！」

それを聞くとまた嬉しそうにどこぞこの何が美味しいとかどこぞこの何が美味かったとかを話し始める勇者。…食べ物の話しかしてないけどいいのかな？

「ん…そろそろ時間ね。奈々」

「えー、もうちょっとだけダメ？」

「ダメ、もう夜も遅いんだし…」

「そうだぞ、夜寝れるのは幸せなんだぞー」

…あんたらが言つと妙にリアルな言葉だ。

「うー…じゃあ、バイバイ」

「おう！またなー」

出来れば私は二度と会いたくないのだけれど、お別れをして宿へと向かう。

「それでね、それでね」

「うん、うん、」

楽しそうに何を話していたかを身振り手振りで話す奈々の頭をなでながら空を見上げる。そこには満天の星空とまん丸の月。

「もー！聞いているー？」

「ん…ああ、聞いている聞いている」

「そう…ならいいけど…あ、そういえばソラ」

「ん？なに？」

「次の目的地、どつする？」

「そうねえ……」

少しだけ後ろを振り返ってから答える。

「北にしようか」

「北？」

「ええ、せつかく美味しいもの聞いたんだし、食べに行くのも悪くないでしょ？」

「うん！」

奈々と二人手を繋ぎながら宿へと歩く。

それにしても北か：寒いのかな：防寒具はしっかり用意しとかな
いと。

楽しそうに語り始めた奈々の言葉を聴きながら次の場所への準備
開始つと。

勇者って魔王退治した後何してるんでしょうね？（後書き）

途中で心が折れて結構カットした場面がたくさん！

でも気にしない特に関係ないし

ところでコレって旅人である意味あるの？とか考えたら負け

それにしてもキャラが変わっても展開の仕方とかが変わらないのは
如何なものだろうか：

次はネタが思いつき次第！

そろそろシリアスとかその辺使いたいな〜とか思いつつもまだ使える
ネタが少ないな〜とか考えつつつらつら行こう

ではではお付き合いいただきありがとうございますね

ああ、お祭りに行きたい・・・（前書き）

12時30分 執筆開始

4時45分 執筆終了

4時間にも渡る徹夜で書き上げたこの瞬間！
私はコレだけは言いたい！
何も夜じゃなくてお昼に書けばいいのに

ということとで人物表

ソラ

旅人 魔法使い？ お面が頭に乘っかけてます

奈々

旅人 剣士？ いまいちキャラが固まらない！

ああ、お祭りに行きたい・・・

「…ホントに行くの？」

「そんな心配そんな顔するなって、俺の部隊は後方だからそんなに危険じゃないよ」

私がそう聞くと彼は笑いながら私の髪をくしゃくしゃと撫でて来た。そんな乱暴にされたら髪がくずれるっつーの！

「それじゃ、そろそろ行くわ。帰ってきたら一緒に飲み明かそうぜ」
「！」

「…うん」

「あー、もう！ほら！」

「わわ！？つて…お面？」

「お守り、大事なものだから持ってな」

「…お守りを私が持つても意味ないと思うのですが？」

「そういうなって…それじゃいつてくるわ」

「うん、がんばってきてね」

「おう！今度帰ったきた時は英雄になってるかもな！」

「ふふ、君は少し身の程を知ってればいいと思うよ」

私は強引に乗つけられたお面の位置を直しながら出て行く彼の姿を見守る。それにしても自分自身のお守りを残った私に持たせるって…あやつはいったい何を考えてるんだらう？

彼の行った場所は後方ではなく最前線で、つまり彼は私に心配かけないように嘘を付いていたことを知ったのは、それから数日後の話。

その後、私のところへと届いた彼の死体を見ても、涙は出なかった。

ん…：実にいい天気。見上げればそこには青空！

隣を見れば割と頻繁に馬車がばかばこヒーンと走っており、時と場合によってはピクニック感覚で歩きたいものよね！

「水だけど…あと1日持てばいい方かな…」

私の隣、つまり道の端の方で荷物のチェックをしていた奈々がぼつりと呟いた。

「…さいですか」

そう！水さえあればね！

というか何ですつと晴れ続きなの！？私を殺す気？よろしい、そういうつもりなら思惑通り干からびたミイラの仲間入りを果たして見せようか！？

ああ…次の街までが遠く感じる…というかこのままだと確実に死ぬ。旅人が干からびて死ぬとか、ホントに笑えない最期すぎる。

それにしてもいったい誰だ、北のほうは寒いって行った輩は…むちやくちや暑いじゃない！だから私は勇者なんて嫌だったのよ！連中と関わると大抵ろくなことにならないんだから。

「それじゃもうすぐ街だし行く？（後、勇者様は関係ないからね？）

私がうつうつむんむんと名も知らぬ勇者ご一行に呪いの言葉を送

りながら銃の手入れをしていると、奈々がワンピースに付いたほこりを払いながら立ち上がった。

「ええ、もうすぐだし行きましようか（はい…全部は私の見通しミスであります…）」

銃を仕舞うと、お互いに（ ）の部分は言わずに歩き始める。これぞ以心伝心か…。

「…銃なんて必要あるの？」

「んー？」

見れば奈々は私が銃を仕舞ったところを見ながら聞いてきた。

「んーと？どういう意味？」

「だってあんなんじゃ何も殺せないよ？」

あー、そういうことね。つまり対して役に立たないのにどうして銃を使ってるのか、ってことかー。

「まあ確かに、こんなんじゃ当たり所が悪くない限りは人でも殺せないわねえ…。」

仕舞いなおした銃を取り出して奈々に見せる。うん、何かの魔道具だとか何かの魔法が掛かっているとか魔科学物だとかそんなことは一切ない。何処からどう見てもただの銃だ。買った私が言うんだから間違いない。こんなんじゃ何発撃とうが人が小動物くらいしか死なないわね。

「だって殺せないんじゃ下手に刺激しても意味ないじゃない」

「だねえー」

手負いの獅子は怖いって奴ね。

実際、今のご時世にただの銃を使ってる奴なんてそうそう居ない。理由は簡単、魔物相手には全く役に立たないから。銃使うくらいなら果物ナイフ片手に戦ったほうが手に持っている分はるかに役に立つって見解が多い！まあ、実際に戦えるかは置いとくとしても…つまりは擬似接触が起きるか否かの問題。ぶっ刺した刀身から境界なり何なり使えばそれだけで致命傷になるわね。出来るなら、だけどもましてや持ち歩ける物なんて…威力はお察しである。では何故あんなのか、つまり…ないよりマシって奴ね！

「それでも何でソラは銃を使うの？」

「んー…」

何で使う、か。

少し考えてから選び出す。

「かつこいいから！」

「はあ？」

「冗談よ…簡単に言うくと魔物よりも怖いもの対策ね」

「魔物よりも怖いもの？」

「ええ、怖いもの」

「ふーん…」

あれ？その反応…もしかして興味なし！？

「えっと…興味なし？」

「だって私銃使えないしー」

「そ、そう…」

ドキっ！ソラ先生の授業モードに入ろうとしただけにちよつと残念。

「そついえば…さ」

「んー？」

「そのお面っていつも乗っけてるよね？そんなに大事なの？」

私が頭に乗っけてるお面を団扇代わりとしてパタパタ扇ぎつつだから歩いていると、奈々が興味津々で聞いてきた。

あー…コレ？

「んー、大事といえば大事かしらねー？」

「へえー…」

「…貸さないからね？」

「…何で？」

「いい、奈々？大事なものの。もしも貸して壊されたりしたら困るでしょう？」

一応あいつの忘れ形見だし。

「壊さないもん！」

「よし、そついうことは卵をきちんと割れるようになつてから言うか！」

「うー…」

ふっ…力加減が出来ないのに触りたいとは言語道断！

奈々はしばらくの間うーうー唸っていたが、やがておとなしくなった。…諦めたかな？

「まあ、お面が欲しいなら次の街で買ってあげるわよ。お祭りして
るらしいし」

「…お祭り？」

「何祭りか忘れたけど祭りらしいわよ。情報提供者は宿屋のおじさ
ん」

それにしても勇者のときといい、あのおじさん何してる人なんだ
ろうか…。色々なことに詳しくすぎるでしょ。

「ふむう、お祭りがー」

よし、乗ってきた。話題変更成功！

「お祭りは初めて？」

「うん」

嬉しそうに頷く奈々。こついうところは子供なのにねえ…？

「失礼なこと考えてない？」

…何のことでしょうか？

「…それじゃお祭りに先立って軍資金を分け合いますよっか」

私の方を軽く睨んでくる奈々を見ないようにしながら、お財布の
チエック！うわー、予想以上にすくなー。

…どうする私、この財布の中身だと公平に分担したら大して買わ
ずに終わってしまうじゃないか…今更ながら金銭的にきつという
名目でいたいたいけな少女のワクワクをつぶせるだろうか！否！つぶせ
まい！

…仕方ない。こうなったら奈々の分を多くして次の旅費は何とか街で稼ぐしかないかなー。

「ほい、あんたの分」

「やけに多くない？」

「キノセイダヨ」

奈々の分を計算して渡すと、彼女はジト目でこっちのほうを見てきた。こ、子供なら子供らしく素直に受け取りなさい！

「しつかり持ちなさいよ。噂では祭りに乗じて人攫いとかスリとか色々沸くらしいから。ちなみに情報提供者は宿屋のおじさん」

おじさん……いたい何者なんだ…。

「人攫いねー…でもそれって私関係なくない？」

「奈々…？そういうタイプが一番危ないのよ…？」

「だって、さらわれたらソラが助けてくれるでしょ？」

私がそう言うと奈々が恥ずかしそうにこっちを向きながらそう言った。

「ええ……まあ…。」

私で勝てるかなー？

「…やけに消極的な返事」

「き、気のせいよ！ど…ぞのお姫様もびっくりの救出劇をしてあげるー！」

「うん、まあ…期待してる…。」

私が晴れ渡る様な笑顔で約束すると、奈々はすごい勢いで顔を背けながら呟いた。

あるえー…？私何か悪いことした？

「あ、ほら！街！」

いったい何が悪かったのか悩んでいると、奈々にはもう街が見えたらしく、遠くのほうを指差している。ちなみに私にはまだ見えな

い。
「へえ…じゃあ後もう少「隙あり！」」

私が手のお面を頭に載せようとした瞬間、お面を取ろうと奈々が飛びついてきた。それは彼女にとっても私にとっても何てことはないような日常のページ。

しかし私たちにとって不幸だったのは、私がお面をかけようとして持ちつていなかったこと。奈々が高いところにあるお面を取ろうと勢いよくジャンプしたこと。そして私たちの歩いている場所はきちんとした道であり、よく馬車なんかが通っていたということ。

結果、誰の手にも留まらずにはじかれたお面は飛んでいき…。

「「あっ…」「」

私たちの目の前で馬車に轢かれましたとさ。

「…」

思わず無言で割れたお面を見つめる私と奈々。

「あの…さ？」

「…」

「その…えっと…」

「…ごめん、少し黙ってて」

「うん…」

割れたお面の欠片を拾い集めると袋に包む。あー、コレはダメかなー…。

「その…ソラ…？」

「…」

「な…何よ！そんなに大事ならきちんと持ってればいいじゃん…っひー？」

無意識に手を振り上げて奈々のことを叩こうとするのを何とか止める。

「…ごめん」

「っ！もうソラのことなんて知らない！」

私が手を下ろして謝ると、奈々はそう叫んで街のほうへと走ってしまっただ。去り際に、彼女が涙目になっているのが見えた。ああ…泣かしちゃったな…。

全く…アレから何年も経っていて、もう忘れてると思ったのに…私も困ったものね。

振り下ろした手が当たる瞬間、ソラは手を止めるとゆっくりと下ろした。怖かった。そのときのソラは私の知っているソラと違うみ

たいで…いつものソラがどこかに行っちゃうみたいで…。

「…ごめん」

「っ！もうソラのことなんて知らない！」

気が付いたら私はそう叫んで駆け出していた。

「はあ…」

街の手前、門の辺りで一人ため息を付く。つくづく私ってバカだなーと思う。

中を見ればそこにはきらきらと光っているお祭りと楽しそうな人の群れ。ああ、あんなことがなければ今頃、私たちも一緒にあの中に居たんだろうなー。

誰が悪いかなんてわかりきっている。いつもそう、私が悪くて失敗してもソラは笑いながら何とかしてくれて…だから私はそれに甘えてしまうのだ。

「はあ…」

後ろを見てから何度目になるかわからないため息を付く。追いかけては…来てくれないよね。

さつきから嫌われただろうな…。とかもう付いて来なくていいって言われたらどうしよう…。とか、そんな思考ばかりが頭の中でぐるぐるとループしている。謝るのが一番なんだけど、それだけで許してもらえるかどうか…

「お祭り…か…」

ソラと一緒にのお祭り、楽しかっただろうなー…。ん…？お祭り？

そういえば…私が怒ったときとかよくソラは物で懐柔したりするね。そんなもので懐柔されなれないと思っても何だかんだで気が付けば怒りがどこか行っちゃうし…。

つまりソラはあのお面を大切にしていたみたいだし、お祭りで何か買って謝れば許して貰えるかも！？幸いお金はもう貰ってるし…：そうと決まれば早く選んで送らないと！

という風に意気揚々とお祭りの中に入ったのはいいけど…：何こころを見れば人、人、人！左を見ても人、人、人！つまりすごい人の波！。

私こんなに人見たの初めて…：って贈り物探さないと…。
とはいっても何がいいんだろう？周りを見渡せば人のほかに綺麗な色の屋台とか美味しそうなものばかりであふれてるし…：こんなことになるならソラの好み聞いとけばよかつたな…。

「お、どうだい、たこ焼き！美味しいよ！」

私がそんな風にきよるきよると周りを見渡していると店のおじさんが声を掛けてきた。たこ焼きかー、たこ焼き…うん、美味しそう…。食べたことないけど。

「1つくださいな」

よし、たこ焼きをゲット。

でもコレってホントに美味しいのかな？少し味見を…：美味しい。私が気が付いた時、手に持っていたはずのたこ焼きはすべてなくなっていた。私ダメじゃん！

うー…：こればやソラに許して貰えないよー…：何か他に別なものを…。

「お？綿菓子はどう？甘くて美味しいぞ！」

甘いのかー、ソラも甘いのは好きだしいいかなー？

「1つくださいな」

…気が付いたらソラに貰ったはずのお金が後少しになっていた。

「ダメじゃん私…」

薄っぺらくなつたお財布を覗いてポツリと呟く。いったい何に使つたのか…記憶を思い返してみるもお金は戻って来ることはなく…
うー…どうしよう…もう余計なものは買えないし…。

悩みながら辺りをきよろきよろと見渡すと、一つだけ不思議な看板が目にとまった。

『あなたの欲しいものあります』

欲しいもの…ソラと仲直りできるもの、あるかな…？

奥のほうにぽつーんと置かれたそのお店に行ってみると、なぜか誰一人としてお客が居らず、サングラスをかけた白髪でながーい白ひげの店主が暇そうにこちらをちらりと見ただけだった。…もしかするとおじいちゃん？

ん…。

一応お店なのだからやっているのだろう。うん、そうだろう。
ということでお店の中を物色してみると…また変なものがあふれてるあふれてる。

よくわかんない装飾の付いたペンダントにブレスレッド、後は何

かの棒やら狐みたいなお面やら…狐みたいなお面！？
思い出してみてもソラの持ってたお面は狐っぽかった！

「おじさん！コレ！コレ頂戴！」

思わず興奮しながらお面を指差すと、おじいちゃん？はゆっくりのっそりと私の指差した物を手に取った。それにしてもお金は足りるかな？大丈夫かな？

「い、いくら…？」

恐る恐る聞いてみると、値段は残ったお金でぎりぎり買える範囲。

「あ、ありがと！」

私は代金を払って思わずお礼を言ってから、狐のお面を手にぶら下げてる袋へと仕舞うと走り出した。

コレでソラに謝れる！

んにゃ…？

目を覚ますと、私は知らない広場で寝っ転がっていた。んん？
ここは何処？

とりあえず動こうとしたけれども、体が何かに縛られているのか、よく動けない。おまけに口にも何か嵌められていて、喋れない。

何でこうなっただっけ…？

確か狐のお面を買ってから走り出して…少し走ったときに後ろから何かを嗅がされて…それで意識が…ってお面は…？

慌てて確認をすると袋はちゃんと付いてるみたい。よかった…

ちゃんと確認したので改めて周りを確認すると、もうすぐ日が沈むらしく、辺りは薄暗い。あとは私のほかにも何人か縛られてる子が居るみたいでなにやらもぞもぞと動いている、後は近くに昼間見たような馬車。ふむう…？

まだ頭がぼんやりしていて状況がよくわからない。

馬車の近くには大人の人たちが数人居て、何番は何々とか何番はどうとか話している。

暗くてよく見えなかったのだけど、どうも男の人たちが話している番号は転がっている子達についている札のことらしく。つまりは私にも付いてるらしい。

…えつと…つまり…人攫い？

そして思い出されるのは昼間のソラとの会話。

『噂では祭りに乗じて人攫いとかスリとか色々沸くらしいから』

私さらわれたの!？

現状を把握するとどうにかその場から逃げようと力を入れるけれども、薬のせいかわり方が上手いのか、上手く力が出ない。

拙い、この状況は拙い。このままだと奴隷市場に売られるかなんにしてもろくな事にならない。

そ、そうだ…私がここにいるならソラが居るはず!ソラは何処!？

あ…。

そこまで考えたところで思い出す。どうして私がここに居るのか。何で近くにソラがないのか。

私、ソラと喧嘩したんだっけ…。

つまり…ソラは…来ない…？

そう思うと自然と涙が浮かんできた。

ヤダ…ヤダよう…。

まだ謝ってないのに…お面…渡してないのに…ちゃんと仲直りして…お祭り…行きたかったのに…
お別れなんてヤダよう…ソラ…。

どれだけそうしていただろうか、突然数発の銃声がすると男たちが倒れた。

今の銃声はもしかして…。

「あ…こんなとこに居たか。全く、迷惑な連中ね…」

そして聞きなれたいつもの声と赤いコートに和服の彼女。

「今ここで死んで地に帰るか、それとも自首して私の旅費になるか、選ばせてあげる」

「もつと早く助けるバカー！」

私が奈々を助けると、彼女はそう叫びながら私の脛をキーク!

私は悶絶した。

…私、泣いてもいいよね?

万死に値する人攫いの連中を軽く脅して軍資金を獲得したり、奴らを自首するように脅したり、さらわれた子達を帰したりした後、私は改めて奈々と5日目の祭りをまわっている。

よく知らないけどさらわれた子の中にはどこぞのお嬢様も混じってたらしくお礼がしたいから家に来いとか言われた。当然断った。ナニソレコワイ。世の中貴族と王様のお礼ほど信用できないことは

無いのである。

それよりも信じがたいのは奈々の金銭感覚！アレだけ渡したのに初日の、しかも半日で使い切るとは…いったいどういう使い方をしたのやら…。

「ほら！ソラ遅いー！」

「はいはい、そんなにひっぱらないの」

私を引つ張ってく奈々につられる様にしながらのんびりと追っ。さすがに5日目となると最終日らしくかなりの賑わいで人がすごい。奈々曰く初日もすごかったらしいが、私は一日彼女を探していてそれどころじゃなかったのである。私に探知は出来ない！

それにこちとらばれないように高いところから飛び降りたり、腰が抜けて歩けない子達を抱えて走ったりして腰と足が痛いのだ。どうせ助けるなら上からかつこよく！とか、まだ若いんだから強化符なしでも大丈夫！なんて考えたのが拙かった…非常に拙かった…。おかげでここ3日間は奈々の看護でベット生活よ！

祭りの化身とまで言われるほどの祭り好きな私がお祭りの時にベツト生活、私何か悪いことしたのかな…？

そんな生活は奈々がやけに嬉しそうだったことよりも何よりも、ここぞとばかりに大量に剥かれた林檎という凶器のインパクトが強すぎた…もうしばらくウサギさんは見たくない。

「もー！早くー！」

「そんなに急ぐとはぐれるよ…。」

主に私が。

奈々は事件のショックも無い様で以前と変わらずちょこちょこ動き回っている。

一方私は事件後の運びと救出劇でのろのろと動くしかない。何こ

の理不尽！いたい私は誰に怒ればいいの！？

何でも最終日は花火があるらしく、そこへ祭り中に見つけたお気に入り場所へと連れていきたいらしい。情報提供者を聞いたら白ひげサングラスのおじいちゃんって言われた。誰その怪しいの。

私は別に宿屋でもいいって言ったのだけれど…そりやもう真剣に言ったのだけれど…悲しいけど、聞き入れてもらえなかったのよね。奈々に急かされながらも、えっちらほっちらノロノロと移動しているうちに目的の場所に着いたらしく彼女はきよるきよると誰かを探すような仕草をした。

「あ、おじいちゃん」

どうやら彼がこの場所の提供者、サングラスに白ひげのおじいちゃんらしい…うむ。有名な魔法使いみたいな名前をつけようと思っただけど何も出なかった。

私が彼をどう呼ぼうか悩んでいると、奈々は白ひげおじいちゃん和二、三言喋ってから私のとに戻ってきた。そして何処かへと行くおじいちゃん。よし、いいタイミングだ！言うことがある！

「いい、奈々？お願いだからあんな怪しい人とは付き合わないで…？」

ただでさえ勇者とか言うのと出会ってるのに…いずれ変な人脈が出来そうでお姉ちゃん泣いちゃう。

「そんなことよりも！」

私が将来の人脈について悩むことはそんなことで済むらしい。

「そんなことって私は…」「いいから！」「…はい」

そして奈々は無言でもじもじとしている。私も特に話すことがないので無言でさすりさすりとしている。

「その…ね？」

「んー？」

あそこ座れそうだなーとか早く座らないかなーとか考えていると、もじもじしていた奈々が何か言い出した。

「その…えつと…」

「なあに？」

「じついつときは優しく聞き返してあげるのが定石なのはいつものこと。」

「その…じ、これ…」

やがて彼女は何度か言いよどむと、赤い顔で何かを差し出してきた。

「んー…？」

「んー？」

「んー」

タイミング的に爆弾でも出るのかと思ったらお面である。何処からどう見ても狐のお面。

「んとう…？これは…？」

「いまいちお面を差し出される意味がわからないので聞いてみる。」

「これはアレだろうか？私に狐になって過ごせという催促なんだろう。」

か？もしくはお稲荷さんが欲しいとか？お稲荷さん…食べたいわねえ。

「その…お面…壊しちゃったから…」

…ああー、そういうことね。

「ごめんなさい…」

「そんなこといいのよ」

「あっ…」

「ありがとう、無事でよかった」

ぺこりとお辞儀をした奈々を抱きしめて優しく撫でる。

つまり、壊したお面の代わり、というわけね…。

あのお面は形見みたいなものだったけれど…まあ無くても思い出は無くならないものね。

「でもね、奈々？」

「ん…？」

私の胸にくすぐったそうに顔を押し付けてくる奈々にささやく。

お祭りもクライマックスのようでたくさん打ち上げ花火が大空に舞っている。

「あのお面…狐じゃなくて犬だったのよ」

決して譲れないものがここにはある！

「い…ぬ？」

「ええ、犬。狐じゃなくて、犬」

「…そ」

お面屋さんには犬のお面もあつただろうしつまり奈々は間違え…
ぐふ！

「ソラのバカー！」

脛を蹴られて悶絶しながらも声を掛ける私。なじえ…？

「ちよつちよと待ちなさい！奈々！？」

すると私の声が届いたのか、数歩行つた時点で奈々は立ち止ま
た。

「…たら許してあげる？」

「んー？」

「…スしたら許してあげる」

「えーと？」

「つもつ知らない！ソラのバ…っ！？」

私は痛む足を堪えながら何とか奈々の下に近づくと、振り向いた
拍子に唇を塞ぐ。

「コレで許してくれる？」

「…ソラのバカ」

奈々はそう呟くと私の胸に頭を埋めて来た。あの…奈々さん…？
もたれ掛かられると腰が…私の腰が！？

「ちよつ！ソ、ソラ！？」

やがて私は奈々の体重を支えきれなくなり、最後の力を振り絞って彼女を衝撃から守りながら後ろへとびたーん。

そして私の後頭部が地面にごっつーん。
結果意識がずどーん。

「ああ、お花畑が見える……」

「ソラ！それ花火だから！ダメ！そっち行っちゃダメ！」

霞んでいく意識とお花畑の中、奈々の慌てた声が聞こえてきたよう気がした。

ああ、お祭りに行きたい・・・（後書き）

Q・「最後のキスシーン居るの？」

A・「完全に要りません」

3日連続更新で大丈夫か？

大丈夫じゃない、問題だ

ということなぜか3日連続投稿となりました

何だか初代短編くらかわを彷彿とさせる更新ペース…

ちなみに定期投稿中もこのくらいのペースで書いてました

第2話で4週間投稿待ちとか普通にあつたものね！

すぐ書きちゃうんだね

3日連続投稿はあれど！

4日連続投稿は絶対でない！

お友達から微妙な評価を受けまくっている今作ですがきつと続きます

続くよね？

続くはず…

続くかなー？

ドウナンダロウ

評判悪いのならばパツと切り上げるのも手かなーと考え中

では、お付き合いいただきありがとうございます

返事が無い、ただの屍のようだ（前書き）

4日連続は無いといったな、アレは嘘だ！

というか楽するために不定期更新にしたのに何故私は毎日更新しているのか！

Q・「何処が不定期なの？」

A・「投稿時間が不定期じゃないですか！」

5日連続は無いと信じたい…

というかこのペースだと過去最速でのシリーズ完結とかしそうです
ナニソレコワイ

人物表

ソラ

旅人 魔法使い？ ここに書くことが無い！

奈々

旅人 剣士？ まだ出会って間もない頃の奈々さん

返事が無い、ただの屍のようだ

私が火をおこしていると、ワンピースの少女が魚を手に近づいてきた。少女の首には何かのネックレス。びくりとも動かない無表情っぷりがなんとも言えない人形らしさをあらわしている。

「おー、ちゃんと教えたとおり獲れたんだねー」

彼女から魚を受け取って頭をなでるけれども、首を縦に動かすだけで表情が全く変わらない。うむう…出会ってから結構経つけど、どうにかして笑わせれないものかねえ？

でも一応コミュニケーションは取れるからいいかなー？

そのまま彼女が獲ってきた魚を焼き火へと並べて一緒に眺める。二人とも無言なので、しばらくの間はちぱちと焼き火が鳴る音だけが響いた。

「ねえ、？」

「っ！」

その言葉を聞いた瞬間、私は半分無意識に彼女のことを殴り飛ばす。

無抵抗で、まるで人形のように吹っ飛んでいく彼女。

「…その名前で、呼ばないで」

私は静かに、勝手に激しくなっていく動悸を抑えるように呼吸しながら倒れている彼女へと告げる。

すると私の何が面白かったのか、彼女は突然笑い始めた。

「…何かおかしいの？」

何がそんなに面白い。

「いえ、こんなにもあなたが人間っぽいのは初めて見たものですか」

おまえと一緒にするな。

「…それはお互い様でしょ」

私は、あなたと違って笑うことは出来るわよ。

「ねえお姉さん？」

彼女は立ち上がると、口の端から血を流しながら笑顔で私の方を見る。まるで人形のようなようだったさっきまでとは全く違う、まるで何もかも見通しているような満面の笑みで。

「ボクは、あなたが好きですよ」

「そう、残念だけど私は君が嫌いだよ」

楽しそうに笑う彼女にそう告げると、私は治療をするために荷物を漁りだした。

その後、夜の森で彼女の笑い声と焚き火がぱちぱちと鳴る音がしばらく響いた。

「この道を少し行くと村があるらしいね」
「……」

私は地図を片手にあまり舗装されていない道を奈々と一緒に歩く。

「村なんて何日ぶりだろうねー。なんにしてもやっと野宿からは開放されるわけだ！」

「……」

私は何度か奈々に話しかけてみるけれども、彼女は無言で無視を続けている。まあ、嫌われてるのは知ってるから当然の反応かな？

「美味しいものいっぱいあるのかなー、奈々は楽しみ？」

「……五月蠅い、少し黙って」

何度か友好的なコミュニケーションに挑戦してみた結果、怒られた。……コミュニケーションって難しいね。

「はい……」

これ以上怒らせると拙いので無言で歩く。私が喋らないから当然、奈々も無言。

そのまま二人とも無言でテクテクテクと歩いていると、突然視界が開けて何件かの家が見えた。

「……村？」

「たぶん……？」

奈々が隣でポツリと呟くので返答をしておく。疑問系なのも無理はない。何せ数件の家以外は濃厚な霧が立ち込めていてまったく見

えない！

というか、ここ人居るの？気配が全くしないんだけど。

「廃墟…じゃないよね？」

奈々もおんなじ感想なのか、少し戸惑った様子で呟いている。まあたとえ誰も居なくても手入れがされてなくても家があるのはひじよーに大きいのだ！

「…行くの？」

「まあ、仮に廃墟だとしても野宿よりはマシでしょう？」

「そりゃそうだけど…」

むむ、なにやら不服そうな様子！どれどれ？ここは時に魔法使いと言われたこともあったりする私がズバツとビシツと解決してあげましょう！

「どれどれ？何か腑に落ちない点があるならお姉さんにどーんつと言って見なさい！」

「…連れがバカで五月蠅くて困ってる」

…私、泣いていい？

結論から言うと人は居た。宿屋があっただから当然である。

「…」

私たちを部屋まで案内してくれた店主が呟くように言った。それ

にしてもこの人むちゃくちゃ青白いけど、ちゃんと食べてるのかな？

「おー、まともまとも」

たえ店主が無愛想でも街に気配が無かろうと宿屋は宿屋！それなりにまともな部屋ねー。

「奈々ー？何処行くのー？」

「…何処でもいいでしょ」

「そ、そう…」

ベットにダイブしている私に向けられる冷たい視線と言葉。そちの人たちなら喜ぶかも知れないけど。私は違うのよね…。

飴玉を口に入れてからぼけーつと窓の外を見ると歩いていくワンピースの少女が見えた。アレは奈々ね。

それにしても後ろから付いていつてる人は何なのかしらねー？もしかしてファン倶楽部！？私というものがここに居るのに奈々に付きまとうとは…。

それにしてもゾンビみたいな動きね。ちゃんと食べてるのかしら…ん？

「あいあいー」

突然我が部屋をノックするのはだーれかな？

ドアを開けると男の人が斧を振り下ろしてきたので素早く体を開いて避けると、そのまま拳を叩き込んだ。

そのまま銃を抜くと、廊下に倒れている彼の両足を撃つておく。

こんなもの効くかどうかわからないけど念のため。でもここに来たってことは…奈々にも行つたわね…。

そこまで考えると、すかさず廊下の奥で斧を振り上げていた輩に

数発打ち込む。

やっぱりというか当然というか、連中は弾が当たっても少しよけるだけでそのまま斧を投げてきた。

とりあえず飛んできた斧を結界で弾いてから強化符を発動、そのまま窓ガラスを撃つて外へと飛び出す。

着地と同時にナイフを抜くと、茂みから飛び出して来た女性へと突き刺した。

相打ちで包丁が肩に刺さったけれど気にしない。そのままナイフを媒介にして結界を強引に発動させて女性を引き裂く。

「あー…今日は厄日ね…」

私は吹き出ている何かの黒い血を浴びながら口の中の飴を噛み砕くと、奈々の下へと走り出す。とにかく今彼女が殺されるのは拙い。女性が倒れていた場所には、黒い血溜まりがあるだけだった。

「ちょっとなにすんのよ!」

幸いというか何というか、奈々の位置は彼女の怒鳴り声で把握できたのでそこまで走りまわる必要はなかった。いつもこういう風に見つけやすいといいのだけどね…。

「…ソラ?」

私を見つけて目を丸くしている奈々にウインクをしてから、鋏を振り上げてる奴の腕を飛ばしてから蹴り飛ばす。そのまま蹴りを入れた回転を利用して振り向くと奈々を捕まえている奴の頭に弾を数発プレゼント。

「待たせたわね、とにかくここは拙いから行きましよう?」

倒れていく男を最後まで見ずに奈々の手を取ると、2度目の強化符を発動させてまた走り出した。

「ここまでくればいいかな…?」

何処かの民家にお邪魔中。緊急事態なので鍵は壊させていただきました。

念のため窓から辺りを見渡すけれども、なにぶん霧が濃くてよくわからない。あの連中は気配もしないし。

「何なのよあいつらは…」

結構な速度で走ったのに、息切れ一つなく付いてくるのはさすがというところか。

「たぶん死霊ね、似たようなのを何度か見たことあるわ」

まあ、当たらずとも遠からずでしょう。

「死霊?」

「トラップみたいなもの。こういう風に廃墟になっている村とかに設置して人間を狩るための」

「何でそんなことを…」

どこか驚きながら聞いてくる奈々。何で…ね。

「今、人と魔物で戦争してるのは知ってるでしょう?つまりここは

私たちみたいな旅人を誘い込んで殺すための場所よ。そして殺された人は次の死霊になる…効率のいいトラップね」

「…どうすればいいの？」

「そうねえ、操っている親玉を倒す…」

か、この霧の中逃げる…のは奈々が居るから無理か。

「しかないわね」

「そう…」

「いい？よく聞いて、奈々」

考えれる限りで最悪のケースは奈々が死ぬこと。それさえ防げるなら街が一つ消えようが腕が無くなるうが大したことは無い。

「これから夜まであなたはここで隠れてて。大丈夫だとは思っけけれど、敵が来たら戦おう迷わず逃げること」

「…ソラはどうするの」

私が言い聞かせるように言うと、奈々は不安そうな顔で見つめ返してきた。

「私は夜まで時間を稼ぐわ。日が暮れば何とかできるから」

大した武器はないけど…まあ夜までは何とかなるでしょう。夜になれば親玉の場所もわかるだろうし。

「ちょっと！あなた怪我してるのに！？」

「…？」

ああ、そういえば腕切られてたっけ？まあ、まだ動くし大丈夫で

しょう。

「いいから、あなたはここに居なさい。全部終わったら迎えに来るから」

奈々を安心させるように笑顔でそう告げて背を向けると、突然彼女に手をつかまれた。

「奈々…」

まったく甘え坊さんなんだから…って!?

奈々は私の手を掴むとそのまま勢いよく、後ろに引く。当然、突然手を引かれた私は体勢を崩して…。

「怪我人はそこで寝てる」

綺麗に足払いを貰って倒れたとき。

「ちよつ、ちよつと奈々!?!」

私は大剣を片手にドアまで歩いていく奈々へと抗議する。せつかく決まったと思ったのに!

「夜までは私が時間を稼ぐから、ソラはここに居る」

わー、命令口調だよこの子。そして目が怖い!奈々さん目が怖い!

「…大丈夫なの?」

「…怪我してるあんたよりは大丈夫」

私はついにあんたに降格しました。ヤツタネ！泣いていい…？
まあ…でも。

「そう、それじゃ任せるわ」

彼女が大丈夫だつて言うんだし、今回は信じて任せてみましょうか。

床に伏せながら目を閉じると、ドアの閉まる音と、私の腕から流れ出ていく血の感覚だけがやけに感じられた。

私が目を覚ますと辺りは暗くなっていた。

どうやら目をつぶっている間に眠っててしまっていたらしい。我ながら緊張感が無いわねえ。

それにしても…彼女の夢を見るのは久しぶりね。

そのまま外へと出ると屋根の上まで上って感覚を集中。さてさてー、どーこーにーいーるーかーなー？

広場にあるやたらと大きい魔力は奈々のだから…あそこか。私は大体の当たりを付けると、少し空を見上げてから腕を振り上げる。

この程度なら杖は必要ない。というか持ってない！

『わが名の下に命ずる』

呪文を唱えれば後は振り下ろす。最後だし、ぎゅーんっていつてドカーンと派手に決めちゃおう！

すると、狙った場所に光の柱が降り注いで家ごと破壊した。後に残るは跡地のみかな。

「みっしょんこんぷりーと」

私はそう呟くと家から降りて奈々の下へと歩き出す。

「お疲れ様、終わったよ、奈々」

大剣を持って荒い息をしている奈々へと告げる。彼女の周りにはたくさん黒い血で黒く染まり。綺麗な水色だったワンピースや彼女の白い肌も同じように真っ黒。

「遅すぎる…バカ」

私は呟きながら倒れこむ奈々を抱きしめて支える。…この程度なら、まだ無理そうね。

「おやすみなさい」

そしてそのまま寝息を立てて眠る彼女を抱きかかえて囁くと、昼間に居た宿へと歩き出した。とりあえずはお風呂と着替えと…ん？
そういえば、宿代はいつたい誰に払えばいいのかしらね…？

彼女の笑いも収まった後、ちょうどいい感じに夕食となる魚が焼けたので手に取る。

「はい、君の分」

少女の分の魚を渡すと、彼女はこくりと頷いて受け取る。果たしてさっきのテンションはどこに行ったのやら。

「そういえば… ?さつき何か言いかけてたわよね?」

ふと思い出したので彼女へと聞くことにする。あの時は殴り飛ばしたから聞かなかったけれど、彼女は私に何か聞きたがっていたように感じる。

「あら、そっちの名前で呼んでくれるんですか」

「新しい名前のほうが好みならそっちで呼ぶけど?」

「いえいえ、どうせボクの名前を知っている人なんてお姉さんしか居ないんですから、好きに呼んでください」

私がそう言うと、彼女はくすくすと笑いを堪えながらそう答えた。何がおかしい…質問に答えるよ。

「…で?何か聞きたかったわけ?」

このままだと話題がそれて自然消滅ってこともありうる。別にそれでもいいような気もしたけど、どうせ暇だし話を続けることにしましょう。

「ああ、そうでしたね。ねえお姉さん?」

どこか楽しそうに、今度は私の名前を呼ばずに言う。

「お姉さんは、いったい何度繰り返すんですか?」

「…さあ、どうだろうね?私知りたいわ」

私がそう返すと堪えきれなくなったのか、彼女は大声で笑い始めた。

「やっぱりボクはあなたが好きですよ。お姉さん」
「そう、やっぱり私はあなたが嫌いよ。来夢^{ライム}」

返事が無い、ただの屍のようだ（後書き）

はい、ということとで第4話です

バトル回ってネタはかなーり前にやったんですが…ちゃんとバトルってましたか？

本気でそろそろ毎日更新がきつくなってきました

というかこのペースなら定期投稿（以下略）

しかしこの投稿ペース

いったい誰が得をするのか！

ちなみに来夢ってのは作者の他シリーズで出てきた子の事です
別に知らなくても問題はないかと思えます

ではでは、お付き合いいただきありがとうございます
少しでも楽しんでいただけたなら幸いです

時計はカチコチ見つめている（前書き）

やあ、とりあえずこの前書きはサービスだから読んで欲しい。
うん、また連日投稿なんだ。すまない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

でも、この名前を見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない
「またお前か」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい

そう思っつて、この小説を投稿したんだ。

さあ、人物表を見ようか

ソラ

旅人 魔法使い？ 回を増すごとにキャラが変わって行く！

奈々

旅人 剣士？ この子は回が増すごとにキャラが安定しない！

エウナ

吸血鬼 別の作品の主人公

時計はカチコチ見つめている

ある日の新月の夜、一人の少女と一人の女性が向き合っていた。少女は背中ほどの黒い髪をしており、女性は腰まである青みの掛かった銀色の髪をポニーテールに結んでいる。

「何で私を生かしたの…?」

「何かご不満? 結構便利だと思うのだけれど…まあ、私がいないと死ぬっていう欠点はあるけれども」

「…不満だつて?」

私が彼女へとそう聞くと、奈々は私を強く睨みながら大剣を取り出した。

「私はこんな体になってまで生きたくなんて無かった!」

「そう…」

叫ぶ奈々をぼんやりと眺める。ならば死ね、とは行かないのが世の中の辛いところよねえ…それにしても元気だ。

「さっきの質問の答えになるけど…」

そこで切ると私は彼女から視線を外して空を見上げた。

「何となく、かしらね?」

本当は素質があつたからだけど、彼女にそれを伝える必要は無いでしょう。

彼女は見えないもの、存在しないものも殺すことが出来る。いつ

だが見えるから殺せるって言う子と一緒に過ごしたことがあるけど…見えるから殺せるのと、見えなくても殺せる、結果は一緒でもこの2つにはかなりの違いがあるわね。

…だから私は彼女を選んだのだし。

「何となくだつて…？」

その私の答えを聞くと奈々が静かに呟いたので、ぼけーっと彼女の黒い髪を見つめる。

「何となくでお前は！」

奈々は叫びながら私との距離を縮め、大剣を横に振るった。

私はその攻撃を後ろに避けてから剣が再び振るわれる前に密着し、その細い腕を掴むと奈々を投げた。…まだ弱いわね。

「いい？私はこれから君に色々なことを教える」

地面へと叩きつけられた奈々を見下ろしながら告げる。

「戦い方や食料の確保の仕方、お金の稼ぎ方からありとあらゆることを教えてあげる。そして全部教えて私よりも強くなったら…」

睨みつけてくる彼女に向かってくすりと微笑みかける。

「そのときに選ばせてあげる。私と一緒に生きるか、それとも私を殺してあなたも死ぬか」

私がそう言うと、奈々は微笑んでる私に向かって笑い返してきた。

「ふーん…それじゃそのときが来る前に答えてあげる。私はあなたを殺す」

「…楽しみにしてるよ」

ええ、本当に。

薄暗い森の中をホクホク顔で歩く。

「大量たいりよー」

手に持つてる籠の中には3匹の魚、1匹も取れないときもあるのだし…思わず声も漏れるって物よ！

食材も手に入ったことだし、後は森の外で食材を買って待っているはずの奈々の下にレッツゴーすれば後は素敵な夕食が待っている！

「んー…」

と思っただけど…ここは何処だろう？

帰り際に二つ道を見つけたから思いつきで行って見たところ…完全に場所がわからなくなった。つい行っちゃうんだね。

とりあえず迷ったときは勘で進むべし！ということとで直進！どこかに着けば儲けもんだね！まあ、困ったときは奈々が見つ付けてくれるでしょうし。何とかなる何とかなる。

そうこうして直進していると人が数人倒れているではないか！第一村人はっけーん！いや、村じゃなくて森なんだけど。

早速近づいて観察してみる。

倒れている人たちは…聖職者か何かかな？聖書っぽい本とかあるし、服とかそれっぽいし。

上手く判断できないのは彼らの服は血で赤く染まっており、さらに1人1人に切り傷か打撃の後が見えるから。

うむ…ドレが致命傷かわからない数の傷だ。犯人はよほどの恨みがあったようだねえ…とかどこかの探偵のように悩んでみる。いや、実際大きな傷は1つで他は擦り傷とかなんだから致命傷もそれなんだろうけど。

「生きてますかー？」

念のため声を掛けてみる。うん、反応なし。コレは死んでるね。

ということで道半ばで倒れた彼らのために少し祈ってから、早速荷物を漁る。ここまで行くともはや探偵じゃなくて泥棒か強盗の類だけれど気にしない。私…旅人なのよね。

食べるためにはお金が必要。死体は物を食べないのである。

「ん…？コレは…」

漁っていたら興味深いものを発見。とりあえず保留にしてお金になりそうなもの、もしくは食べれそうなものを搜索。

うん…うん…何もない。見事に何もない…。

結局最初につかつた物意外はめばしいものが皆無だった。まあ…予想はしてたけどね。

これ以上彼らに付きまといても仕方ないので立ち上がって歩き出す。死体は埋めない。放っておけば誰かが食べるでしょう。

とことこ、とことこ、と歩いているとまた倒れ人はっけーん！

倒れて居る人は今度は金髪で長い髪のドレス姿の女の人。ドレス…？森の中なのに…？

こいつはお姉さん嫌な予感がぶんぶんするぜ！

観察をすると女性のドレスはぼろぼろで血だらけ、さらに白く綺麗な肌は血だらけ。

「生きてますかー？」

今度は先に声を掛けてみる。さらに彼女は手ぶらだからすることもない。まあ、生きてるんだろっけど。

「…生きてるわよ」

声を掛けて観察すること数分。彼女のほうから声が出た。

「助かったわ」

とりあえず適当な広場まで彼女を背負って応急処置をすると、彼女は咳くようにぼつりと言った。

「いはいえー、私に困っているものを見捨てることは出来ない！」

ただし死んでいるものは除く。まあ、祈ってあげたからちゃんと成仏するでしょう。

彼女はそのまま黙り込んでしまったので、割りと暇になった私は適当に落ち葉を集めると強く集中！

するとポンっとピンポン玉くらいの火がついたので、急いで拾い木をくべて大きくする。そして籠の中の魚に串を刺してセット！

後は待つだけで食事の出来上がり。ホントは奈々と食べようと思っただけねど…まあしょうがないか。

「今のは？」

私がそうやってご飯の準備をしていると、彼女は意外そうに火の方を見ていた。

「んー？魔法？」

「…随分と小さいのね」

「苦手だからねー」

「ふーん…そうなの」

「うん、そうなの」

真面目に勉強してない魔術師なんてこんなものさ。

「…動かないで」

しばらく二人でぼけーつと火を見つめていると、突然彼女が立ち上がると私にそう言った。…動くとな？何かあるんだろうか？私が不思議そうに彼女を見つめていると、突然彼女の回りに2人の男が現れた。タブン男でしょう。影でよく見えないけど。

「…やけに堂々と来るのね？」

彼女がそう聞くと、2人は何やらよくわからない言葉で答えた。

…たぶん異国の言葉かなー？

言葉はわからなくても雰囲気は伝わってくる。というよりこの連中殺気ばりばりである。少しは忍べ、もしくは自重しろ。

何にしても殺気があるなら話は別。幸いこっちは気を配ってないみたいだし…。

私は素早く銃を抜くと、何かを言っている2人の頭へと撃ち込んで黙らせる。無視するな。

「ごめん、手が滑った」

倒れていく彼らに対して決め台詞までしっかりと告げる。決まった…。

「…バカ！せつかくあなたは平気そうだったのに！」

と思っただら怒られた。あるえー？撃っちゃダメだったかなー？ダメかと思っただら倒れたほうを見ると、彼らは何やら怒った顔で立ち上がった。やっぱり死なないか！

「…ああもう！」

彼女はそう叫ぶと一人を殴り飛ばして、もう一人の首をもぎ取った。おー、強い強い。何で倒れてたのか気になる強さだねえ。

それじゃ彼女だけに戦わせるのもなんだし私も働こうか。長引くとお魚焦げちゃうし。

『わが名の下に命ずる』

ということで片手を上へとあげると振り下ろす。この程度なら杖の補助も呪文を口に出す必要もない、そもそも杖は持ってない。ペンドント1つで何でもするどこぞの弟子とは違うのだ。

私が心の中で唱えると、細い光る棒のようなものが何本も降り注いで吹っ飛んでいった1名を串刺しにした。

「…あなた、何者？」

灰となっていく彼らの方を最後まで見ずに女性が聞いてくる。

「自己紹介が遅れたね。私はソラ、たぶん100年くらい先の旅人

かなー？」

さっき見つけた死体が持ってた時計の日付は大体100年前だったし。

「そう、私はエウナ。訳あって旅してる吸血鬼よ」

あれれ？

「ほう、驚かないんだ」

「十分驚いてるわよ、それにしてもあなたも逃げないのね」

そんな微笑みながら言われてもなー…。まあ、吸血鬼ってのは驚きだったけど。

「襲うならとつくに襲ってるでしょ？」

私がそう言うと、彼女は面白そうに笑った。

「あなた面白いわね」

「いえいえ、あなたほどじゃないかと？」

少なくとも私は吸血鬼を1発で殺せる吸血鬼は知らないぞ？

自己紹介も終わったので、二人で火を囲って魚を食べる。エウナは食べないらしいので私で3匹分。わーい！

「まあ服とかぜんぜん違うし…何となくそうじゃないかと思ったの

よ

エウナは私に微笑みながらそう言った。…つまりはほとんど勘、と。世の中変な人も居るんだな。人じゃないけど、私が言うことでもなさそうだけど。

「それでエウナは何で旅してるん？」

共に同じ食事を取ったもの同士、打ち解けるのに時間は掛からない！例外も当然居るけど。吸血鬼が旅をする理由…何となくすごそうでワクワク！

「んー…私は安息の地を求めて、かしらね？」

予想以上に枯れた答えが返ってきた…。

「あなたは何で旅してるの？」

「んー…」

私が旅してる理由かー。

「私は色々見て回るためかなー」

まあ、大体間違っではないだろう。

「…見るだけ？」

「うん、見るだけ」

「そう…」

私がそう答えると、エウナは何かを考える仕草をした。

彼女が無言になったので2匹目の魚に手を出す私。

「ねえ」

「んー？」

私がパクパクもぐもぐ骨がいてえ！とやっている、何か考えてたエウナが話しかけてきた。

「もしも昔に戻れたとしたら何がしたい？」

「何がしたい？」

いまいち言葉の意味が飲み込めなくて聞き返す。そして飲み込んだ骨が喉に刺さって痛い。

「んーと、あの時のあの場面に戻れたら未来が変えられるかもしれないじゃない？もしもそういうチャンスが来たら、あなたはどのような？」

なにやら真剣な顔で聞いてくるエウナ。うむむ…もし戻れたらどうするか…？つまりは今が変えられるってことか。まあ、そう言われてるんだけど。

「見て回る、かなー？」

色々考えたけど、コレが正解だと思う。昔の私なら何とか未来を変えようとしたかもしれないけど、今の私なら何もしないで見るだけでしょう。

「…そう」

私の答えを聞くと彼女はまた何かを考え始めた。

このままだと焦げるので3匹目も回収。その結果両手に魚という夢のような条件が成立。

「どうかしたの？」

あまりにも考えているので聞いてみる。悩みは聞かなければ解決しないのだ！

「ん…いえ、ちょっと…ね」

「明らかに何かあるような顔で言われてもなー…」

私がそう言うと彼女はどこか諦めたような顔で空を仰いだ。

「まあ、アレよ。ここからは私の考えになるけど…気を悪くしないでね？」

「んー？」

「あなたは過去を改変する気がない、だからここに居られる」

「…ほうほう？」

「つまりあなたにとっては過去も未来も今も一緒のこと。1000年前だろうが1000年後だろうが、あなたは気づかないし、気づいても変わらないのでしょうか？」

「…へえ？」

「旅の目的は見て回るだけ、って言ったわよね？それってつまり生きてた証を残さないってことでしょ？つまりそれって…」

あなた、生きてないのに旅してるみたいね。最後に彼女は私へとそう言うと、どこか悲しそうな顔をした。…なんであなたがそんな

に悲しそうにするの？

「…ごめんなさい、変なこと言ったわね」

「いえいえ。なかなか的を射た話だったかと？」

過去も未来も一緒だから移動も出来ると…なるほど、何処となく魔法の理屈と似た辺りがあるねえ。

「まあ、何にしても」

私は最後の魚の骨を焚き火に放り込んで言う。

「その理屈なら私は帰れるってことよね」

だって元の世界には彼女が…奈々が居るのだから。
過去にも未来にも彼女はいない。それだけで帰る理由は十分に
あるでしょう？

エウナと一緒に過ごしたのはどれくらいだったか…まあ、何日でも面白かったからよしとしよう！

私たちの目の前には2つの道、何となくだけど来たときと同じく片方は戻れるんだろうねえ。問題はそれがどっちか…だけど。

「あなたはどっちに行くの？」

困ったときは聞くに限る。彼女と別の道を行けば外れはないという考え。

「私は…こっちかしらね？」

エウナは少し考えると片方の道を示した。なるほど…

「それじゃ私はこっちにしよう」

「あなたって随分と適当なのね…」

「何とかなるさ！」

「そう、まあ気をつけなさい」

「お互いにね」

一緒に過ごしている間にわかったけれど、彼女は結構狙われているらしい。寝込みを襲われたことも一度や二度ではない。いったい何をやったのやら…。

「あ、そうそう。コレ、貰ってくれる？」

私はそう言ってポケットにあった時計を差し出す。いつかの死体からありがたく貰ってきたもの。

「…？ええ、いいわよ」

「どうもー」

時計のせいで帰れなかった、とかいう事態になると面倒だし。奴らはマイペースに正確に時を刻むから意外と厄介。

「出来れば会いたいものだねえ」

「出来るならもう会いたくないわね」

「それは残念。あなたのこと好きだったのに」

「私もあなたのことは好きよ？」

ふむう？私が意味を考えていると、彼女は察したのか笑いかけた。
きた。

「好きだから会いたくないのよ。あなた、碌な生き方しなさそうだし」

「ああ、なるほど…」

その言葉を聞いた瞬間。私はなぜか嬉しくなって笑いはじめた。

「それじゃ行くね。名残惜しいけど、ここでお別れ」

「ええ、私も行くわ。お別れの涙はいるかしら？」

そして二人で笑い会つと、ぱちんとハイタッチを交わす。

「願わくばあなたに幸福があらんことを」

そして私たちは歩き始めた。

エウナは平穩の地を求めて。

私は奈々のところに帰るために。

エウナと別れた後、しばらく歩いていると森から出れた。

「ソラ！」

私が出ると、どこか心配そうに辺りをきよるきよるとしていた奈々が駆け寄ってきた。ふむ…奈々が居るってことはちゃんと戻れたみたいねえ？

「どれだけ掛かってるんだ！バカ！」
「ごめんごめん」

怒る奈々にそう謝ると森のほうを見る。

「ちょっと友人と話し込んでね」

「友人？」

「ええ、友人。あ、そういえば…どのくらい待った？」

「んー…大体1時間くらい？」

「それは待たせたねえ…」

「ホントだ…バカ」

ぷりぷりと怒りながら隣を歩く奈々の頭をなでながら歩き始める。
そうバカバカと連呼するでない。それにしても何か忘れてる

「そういえばソラ？」

「んー？」

「…食材は？」

「あ…」

私食べ物探しに森に入ったんだっけ…。

「…晩御飯どうするのよ」

「…どこかで食べよっか」

たまには魚以外が食べたいし。

時計はカチコチ見つめている（後書き）

何故私は5日目突入しているのか！

それは私にもわからない！

だがコレだけはいえることがある！

このシリーズはあと2作で終わると！

エウナさんのその後が見たい方はくらげって可愛いですよ！でも読んでください

追伸

リアルタイムで読みたい人は日をまたいでから確認するといいいと思いますよ

では後2作となります

今回もお付き合いいただきありがとうございます

少しでも楽しんでいただけたら幸いです

猫の体はあつたかい(前書き)

Q・「何処が不定期なの？」

A・「と、投稿日時が…」

ということでも今日もやってきました

ところで毎回読んでくれる人は居るのか…

まあ居たとしても居なかったとしても作者は気づけないですけどね！

次最終回です

いつもの如く最終回にはささやかなおまけが用意されています

暇な方はあとがきまで読んでみてください

ちなみに続編が出るとおまけが消されるので割とお早めに

人物表

ソラ

旅人 魔法使い？ 薬だつて作れるんだ！

奈々

旅人 剣士？ 風邪つて怖いですよ

猫の体はあつたかい

奈々が風邪をひいた！よくひいたなーとか私も驚きだけれど聞く話では幽霊も風邪を引くらしいのでしょうがないかなあ？

風邪…すごいね。

と、いうことで。

「お粥作ってきたよー！奈々ー！」

私は特製卵粥を作って宿屋に突撃したのだった。きつとこのお粥で奈々からは暖かな言葉と笑顔が！ついに私にもあの笑顔が向けられる日が来るのですね！おのれ勇者！

ちなみに私は雑炊派でお粥は苦手。

「…五月蠅い。寝かせて…」

「すみませんでした…」

現実には時に厳しい…。

「だいじょーぶ？」

「…大丈夫に見えるなら…眼科に…」

私が聞くと息も絶え絶えに返事をする奈々。ふむ…。

「とりあえず特製粥を作ってきたからご飯にしましょうか」

なので早速レンゲで粥を掬うと奈々の口元に運ぶ。

「…何？」

「はい、あーん」

「…」

「あーん」

「…」

「あーん？」

あれ？食欲ないのかな？

「奈々？ちゃんと食べないとよくなるよ？ほら、あーん」

「…あの…んぐ」

何か言いかけた奈々の口に放り込む。ふっ…油断するのが悪いのだよ。

「美味しい？」

笑顔で聞く。美味しいよね？美味しくないわけがないよね？

「…変な味がする。何入れたの？」

「風邪薬」

「…」

「…」

私が答えると奈々が無言になる。なので私も無言になる。

「はい、あーん」

「…あーん」

レンゲを差し出すと特に抵抗もせずになんと口をあける。よし

よし、素直なのはいいことだぞー。

「ねえ？」

「んー？」

「…ソラは食べないの？」

「…」

「…副作用は？」

「…」

「…」

「…はい、あーん」

「…あーん」

ごまかしのあーん発動！いや、副作用怖いし。食べたくないし。だって私が作った薬だよ！？副作用がなくて何があるんだ！

「ねえ、レンゲ貸して？」

「んー？いいよー？」

熱のせいかわい顔で言ってくる奈々へとレンゲを渡す。ちょうどいい。私もご飯食べたかったんだよねー。

「はい、あーん」

「…」

この子は何をしていらっしやるのでしょうか？

「あーん…」

少し辛そうにレンゲを私の口元に近づける奈々。

「食べれないの…?」

いやそんな潤んだ目で言われると…でも、その…あの…副作用が
ですね…。

「ソラ、あーん」

「あーん」

屈服する私。いや無理でした。ガツテム！

「んー、いい天気!」

「…おはよ、にゃにゃ」

にゃにゃのが起きたので私も起きる。んー?にゃにゃが起きたのか
にゃー?

「そ、ソラ…」

彼女はいつも寝巻きとして海月柄のパジャマを着ており、に
やぜか私の方を見て目を丸くしている。んー?。

寝ぼけてあまり動かない頭でにゃぜ彼女がそんなに驚いているの
か必死に考える。

「ソラ…頭…」

「んー?」

にゃにゃに言われて頭に手を当てる。

するとにゃんと!そこにはにゃにゃらふさふさとして動く暖かい

ものが！待てよ…！？確か特製卵粥食べさせられたにや…。

急いで鏡に向かうと、そこにはにゃんと！

私の起きたばかりで結ばずに下ろしている髪！そしてその上には猫耳が！さらにお尻には尻尾が生えているではにゃいか…！

「に、にゃんでこんにゃことー！」

思わず頭を抱えて叫ぶ。あ、猫耳がふさふさでちよっと気持ちいい…。ってそれどころじゃにゃくて…！

「ソラ…」

「にゃにゃ…」

頭を抱えていると、笑顔のにゃにゃが手を掴んで立ち上がらせてくれた。信じてた！私は信じてたよ！

「…シネバイイノニ、シンジャエバイイノニ」

「痛い痛いイタイイタイ」

折れる！捻ると折れちゃう！変にゃ方向に曲がっちゃう！

「で、どうにかできないの？」

腕が変にゃ方向に曲がってにゃいか確かめっていると、にゃにゃが真面目にゃ顔で聞いてきた。うむ。

「お気の毒ですが…やめて！腕つかまにゃいで！」

腕を掴むにゃにゃへと私が必死に懇願すると、にゃにゃはすごい勢いで顔を背けた。

「どしたのー？」

「い、いいから！どうにか出来ないの？」

「ふっふっふー…」

不気味さを演出しようががんばって不気味そうに笑う。笑ったびに耳がひよこひよこ、尻尾がふりふり。

ちらりとにゃにゃの方を見ると、真っ赤な顔で天井を見ていた。

「ダメだこりゃ…」

思わず失望して頭を抱える。がんばったのに…がんばったのに…。

「ソラ…がんばって…ね？」

「にゃにゃ…」

何とかくじけそうににやる心を奮いあがらせて私は再び立ち上がる！

「こんなこともあるのかと！」

ビシィ！と指を突きつける。ここにはにゃにゃ以外に誰もいないのでしょうがにゃく窓に向かって。

「解呪の呪文を用意しておいたのさ！」

決まった…。

「ね、ねえソラ！その尻尾にリボンとかつけない？」

にゃにゃがふりふりとゆれる私の尻尾に視線を向けにゃがら言った。

「もうダメだ…」

その言葉を聞いた瞬間、私は頭を抱えた。決まったと思ったのに…完全に決まったと思ったのに…。

「ソラ…がんばって…ね？」

「にゃにゃ…」

なぜかりボンを用意しているにゃにゃに励まされて再度立ち上がると呪文を唱える！

「我がにゃの元に命ずる！にゃにがにゃんでもにゃんとかにゃる！」

「…」

「…」

唱えるけれどもにゃにも起こらない。あれー？呪文間違ったかにゃー？

「わ、我がにゃの元に命ずる！にゃにがにゃんでもにゃんとかにゃる！」

「…」

「…」

「…つづつ」

にゃにゃに起こらずに部屋のにゃかを沈黙が支配した。思わず頭を抱える。ダメじゃん、私…。

「そ、ソラ！大丈夫だからね？ほら！元気出して！」

「にゃにゃ…」

「きつと呪文が間違ってたんだよ！ね？」

何処となく赤い顔で言うにゃにゃ。そ、そうかにゃ…？そこまでいうにゃら…。

「我がにゃの元に命ずる！にゃにがにゃんでもにゃんとかにゃる！」

再度私が唱えると、にゃにゃは真つ赤な顔をしたまますごい速度で上を向いた。

そして私はすごい勢いで頭を抱えた。

「い、今のは…ヤバイ…ヤバイって…」

上を向いたにゃにゃがにゃにか呟いていたけれど、正直それどころじゃにゃい。

どっつするんだコレ…。

「…で、他に方法はないの？」

しばらく落ち込んでいると、上を向いていたにゃにゃが話しかけてきた。他の方法…。無意識で尻尾を振りにゃがら考える。ああ、そういえば…。

「そういえば春のにゃにゃ草粥で解呪された気がするねー」

「ふーん、じゃあ七草粥を作ればいいんだ…で、七草って何？」

「…」

「…」
「…もしかして？」
「…私もしらにゃい」

情報を集めるにはいくつかの手段がある。

一つは酒場で飲んでる人たちから聞き出すこと、二つ目は情報屋に対価を払って依頼すること、そしてもう一つが…

「ここが資料館かー」

にゃにゃが古びた大きな館を見上げて言った。もう一つは、自分で調べること。

結局、どっちも春のにゃにゃ草を知らにゃかったのでお財布の身に切にゃさを覚える私たちは自分で調べることにした。

酒場は論外、人の多いところは遠慮したい。

にゃにゃの提案で猫耳は帽子に、尻尾はコートで隠してある。どっちも動かすたびにざらざらして非常に居心地が悪い。

「それじゃ私はあっちの方を調べてくるから、何か見つかったら教えて」
「あいあいー」

薬草のところを調べるにゃにゃを見送ってから、私は和菓子コーナーへと足を運ぶ。

「何か見つかったー？」
「まだー」

遠くの方で聞こえてくるにゃにゃの声に返事をしながら、目に止まった和菓子100戦を手取る。和菓子の戦いを描いた壮大な本で大ベストセラーを記録しているとかにゃんとか。

ちになみに資料館にゃいは私たち以外にお客が誰も居にゃかったから、普通に声で連絡を取り合ってる。

「何か見つかったー？」

「んー…見つかにゃいねー」

第76話、ぜんざいと洗剤の戦いを読みにゃがらにゃにゃに返事をする。

「へえー…見つかないんだ」

「うん、意外とにゃいものだねえ」

本から目を離さずに、私の後ろから聞こえてくるにゃにゃに返事をする。…後ろから？

「人に探させて読む本は面白い？ソラ？」

にゃんと！そこには笑顔で1冊の本を振り上げているにゃにゃさんの姿が！

「すみませんでした！」

すかさず頭を下げることで必殺！角の一撃！を避けつつも土下座をする。必殺！角の一撃！の風圧で私の帽子が吹き飛んだが、そんなにゃことはかまっていられない。必殺！角の一撃！はむちゃくちゃ痛いのだ！

「
…」

何時来るかわからないので、そのままの体勢で数秒経過。耳と尻尾はふるふる。

「…?」

「…っ!」

やけににやがいで不思議に思って顔を上げてみると、赤い顔をしたにやにやが顔を背けた。

「どしたの?」

「っ!?!…春の七草見つけたよ」

にやにかに耐えるようにしているにやにやに声をかけると、彼女は1冊の本を差し出してきたので受け取る。

うむう…和菓子100戦は名残惜しいけれど仕方にないか。

どれどれー?

春のにやにや草とは7種の野菜を云々…ここはどうでもいいね。

あ、ここかにや?春のにやにや草は、芹せり、薺なすな、御形ごぎよう、繁縷はこべり、仏の座ほとけのますな、菘すずしろ、蘿蔔である。

ふむ…にやるほどさっぱり意味がわからない…。

「わかる…?」

「…一応絵が載ってるからこの本を頼りにして探そつか。とりあえず、八百屋とかで買えるものは後回しにしてその辺に生えてるものから探そ」

「うん」

川原にあるらしいので来てみたけれど…それらしい草は全く見つからない。

「ないねー…」

どこか楽しそうに捨った猫じゃらしを動しているにゃにゃが呟く。

「だねえ…」

その猫じゃらしをタシタシと尻尾で叩きながら私が返した。それにしても…。

「あの…にゃにゃさん？」

「んー？」

「それを動かすのやめて欲しいんだけど…」

私は揺れる猫じゃらしにタシタシ反応してしまう尻尾を見ながら言う。…見えないけどたぶん耳はひょこひょこ動いてるんだろうな…。

「何でー？」

揺れてる尻尾を見つめながらにゃにゃが言う。にゃんでって、いや…その…。

「尻尾が…反応しちゃうんだけど…」
「ふーん」

ふーんってそれだけかよ！

「ん、それじゃ」

手を止めて、にゃんだかすごい笑顔でにゃにゃが言った。…嫌な予感がする。

「その耳に触らせてくれたらいいよ？」

「…」

「…」

「嫌ならいいんだけどなー」

再び動くにゃにゃの手、そしてまたタシタシし始める私の尻尾。

…私に選択肢はないのか…。

「見つからなかったねー」

結局夕方になるまで私の耳やら尻尾やらを触りまくり、どこか…満喫とにゃったにゃにゃが言う。

「…ホントに見つかんかったね」

にゃにゃに尻尾やら耳やらを触られまくった結果、腰が抜けそうになったり魂が尽きかけそうになりながらも何とか答える。真面目に探してたのは最初だけだったようにゃ気がするけど…

「このままじゃずっとこうだねー」

すっごい笑顔で私の尻尾を眺めながらにゃにゃが言う。…それだけは何としても阻止せねば！

「と、とりあえず買えるものだけでも買っておかない？」

このままだと何も進展がなく一日が終わる！

「…まあ、いいけど」

どこか不満そうだけど、にゃんとかにゃにゃの了承を得たので、八百屋へと向かう。草といったら八百屋でしょう？

そしてそこで私は見つけてしまった！

今までの努力をすべて無にする魔の商品を！

「おお…！」

「ああ…！」

嬉しくてしょうがない私の声と、どこか残念そうなにゃにゃの聲が八百屋の店内に響いた。こゝこれはまさしく…！

「春のにゃにゃ草セット…！」

「…え？」

「…！」

「…！」

今までずっと隠してきたのに！最後の最後で油断した結果、八百屋のおじさんに聞かれてしまった。

「ソラ…ほら、元気出して…！」

最後の最後でミスをして落ち込んでいる私にとって、頭を撫でて来たにゃにゃの手の感触だけがやけに優しく感じられた。

猫の体はあったかい（後書き）

「予告」

地球に隕石が降ってくる!?

生命が滅亡するまで残り80時間!

刻一刻と近づくカウントダウンの末にメリー博士の出した結論とは!?

そしてメリー博士の隠されていた秘密とは一体!

果たして空旅の最終回はブレイクユメちゃんにブレイクされてしまうのか!?

新番組!〜不幸少女ブレイクユメちゃん〜お楽しみに!

ラスト1作の予定ですが、暇な方はお付き合いください

では、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

月はグルグル回り続けている(前書き)

最終回です

ささやかなおまけがあとがきにありますが
暇な方はどうぞ

人物表

ソラ

旅人 魔法使い? これでも主人公です

奈々

旅人 剣士? これでもヒロインらしいです

月はグルグル回り続けている

とことごと二人で山道を歩いていると、突然奈々が倒れた。

「奈々？ なーなー？」

慌てて抱きとめて何度か呼びかけてみるも、返事が無い、どうやら意識が無いようだ。うーむ…山道で疲れたかなー？

「ああ、そっか…」

前回からの日と空を見上げて合点がいった。

「今日は…新月だっけ」

ソラは私の幼馴染で、天才だった。

私とソラの両親は魔術師。つまり私たちはいわゆる魔術師の家庭。何だかわからないが親同士の仲が異常とも言えるほどよく、結果というか幼馴染同士の私たちはいつも顔をあわせていた。

ソラは私の2個下で、つまり私のほうが2年ばかり先輩だった。でも、ソラはそんな2年の差なんかじゃ追いつけないほどの天才だった。

私がどんなにがんばっても出来なかったことを、ソラはいともあっさりと成し遂げていた。その様子が私にはとてもまぶしくて、でも置いていかれるのは嫌で隠れて努力をしたりもした。

しばらくの間、ソラに負けたくなくて努力を続けていたのだけれど、悲しいことに私は凡人、ソラに勝てるはずも無い。両親が優し

かったこともあり、私は魔術の勉強もそれほど熱心にはしなくなっていた。

ある日、私がふてくされていたら、ソラに旅に行こうと誘われた。世界にはいろいろなものがあるとか何とか…そのときのソラの顔は歳相応でまぶしくて、そのとき…私はただソラが好きで、それでも置いていかれるのが嫌で努力をしていたんだっけ…と昔の気持ちを自覚してしまった。そう、自覚してしまったのだ。

今思えば、一緒に旅をしようという目的を持ったときが一番楽しかった。もうその時点で普通の魔術ではソラに置いていかれていたんで、私は誰も選ばないような魔術ばかりを選んで勉強した。

ただひとえにソラに追いつくためだけに…追い越さなくてもいい、せめて一緒に並べるように…。

ソラはよく飴玉をくれた。何でもがんばっているご褒美らしい。

その飴を貰ったたびに私は、子ども扱いするなってよく怒った。

そのときはただ信じていた。いつか大好きなソラというんなところを旅して一緒に笑える。そんな未来を。

帰ってきたら一緒に飲もう。そう言ったソラが帰ってきたとき、体はもう冷たくなっていった。それが信じられなくて…私は犬のお面を抱えて何度もソラの名前を呼んだ。

ソラがもう返事をしないと…このことを自覚したとき、私の中で何が壊れた。

たぶんそれが、長い長い物語の始まり。

数日後、誰も居なくなつた家から私は旅立った。

ソラが言っていた世界を見て回るために。

今思えばそのときから私は既に私でなくなつたんだらうか？

私にはわかんないよ…教えてよ…ソラ。

私は…どうすれば君のところに行けるのかな？

廃墟となっているドーム内には明かりが漏れており昼のように明るい。

そのドームの中心には一人の女性と一人の少女が居た。

少女は背中ほどの長さの黒髪と雪のように白い肌の上に白いワンピースで、少女は地面に横たわって静かに眠っている。

女性のほうは赤いコートの下に紺色の和服を着ている。腰ほどまである長い銀色の髪はポニーテールに結んでおり、狐のお面を両手で抱き抱えるようにして座っている。彼女が座ると長い髪が地面についているのだが、彼女本人は目を閉じていて特に気にしている様子は無い。

時折、彼女はポケットから飴を取り出して口に含むとするが、何かに気づいたかのようにするとその動作を止めている。

「…久しぶりに魔法から解けた気分はどう？お姫様」

瞳を閉じていると、奈々が目を覚ました気配がしたので瞳を開ける。

「…最悪ね」

「そう、それは何より」

彼女が起きたということは、いつまでもこうして座っているのは危ない。私は立ち上がると手に持っているお面を頭へと乗せる。

「あなたはまだ私を恨んでる？」

後はいつもやっている確認。別にしなくてもいいけれど、彼女にも戦う前の心構えは要るでしょう。

「当然、お前は私の家族を殺した」

「家族だけじゃないけどねー」

「…」

私を睨む奈々に向かってクスクスと笑う。… ホント、いい目ね。

「ほら、それじゃ来なさい。どれだけ強くなったか、試してあげる」

私が強化符を発動させながら挑発をすると、奈々は一瞬で距離を詰めてきた。そしてそのまま何処からか取り出した大剣を振るう。とにかく、彼女を追い詰めて性能を出させないと…。

私は後ろにステップをして大剣をかわしてから着地と同時に銃を抜いて彼女を撃つ。

自身に向かつて放たれる弾を左右に軸をずらしたりその手の大剣を使う事で避けながら私との距離を縮めてくる奈々。

私は近づいて来た大剣の軌道を銃で上へと強引にずらすと、そのまま回転をかけて威力を強めながら彼女の体を蹴り飛ばした。

倒れて居る彼女へと追撃をしようと銃を構えるが、どうやら今の防御で壊れたらしくトリガーを引いても弾は出なかった。

弾の出ない銃など何の役にも立たないのでさっさと捨てて片手を上に上げる。

「我が名の下に命ずる」

彼女が完全に起き上がって近づいてくる前に素早く呪文を唱えると、振り下ろす。

奈々が起き上がって移動するのと、光の槍が天井を突き破って彼女の居た場所に降り注いだのはほぼ同時に見えた。いや、避けられただけから奈々の方が少し早かったみたいね。

そのまま流れるような動きで光の槍を避け続ける奈々。当然、私も見ているだけではなく彼女へと素早く近づくといくつか打撃を入

れてはすぐに離れる。

いつまでそうしていただろうか、やがて彼女は私の手を掴むと投げ飛ばし、大剣を使いながら槍を弾いて追撃をしてくる。

私は彼女の攻撃を何とか避けようとしたが、なぜか体が上手く動かない。見れば私の体に糸のようなものが絡み付いていた。

奈々は大剣を振り下ろして私の結界を壊すと、何とか横へと避けた私を裏拳で殴り飛ばした。当然、体が動かないので威力を殺すことも出来ずにその攻撃を貰う私。

「じほっ…」

咳き込んで倒れた私に奈々はゆっくりと近づいてくる。彼女が1歩近づぐごとに、照明となっていた魔法が力尽きて消えていく。今のは効いた…これはもうしばらくは動けそうに無いわね…。

「これで、終わりね」

もうお互いの顔もよく見えないほどの暗さの中、奈々は最後まで近づくと大剣を振り上げた。もう私は抵抗をやめて瞳を閉じたまま最後の瞬間を待つ。

私の頭の上でガンツという音がした。

閉じた瞳を開くと、奈々の大剣は私の頭ではなく、私の頭の少し上の方に振り下ろされている。

「…どうしたの？」

俯いている奈々へと聞く。私が憎いんでしょう？あなたから全てを奪った私が。

「…だよう…」

彼女が何かを呟くと、突然私に絡まっていた糸が解けた。もしかして…泣いてるの？

沈黙の中でカランカラン、と奈々の持っている大剣が落ちる音がする。

「お別れなんて…やだよう…」

「…」

「私はソラずっと一緒に居たいよう…これでお別れなんて…やだよ

う

涙を流しながら一人呟く奈々。

「…奈々」

「ソラ…！」

あまり動かない体で何とか立ち上がると、彼女は泣きながら抱きついてきた。

「…もういいのよ、奈々」

もういい。

「ソラ…」

私は片手で泣いている奈々の背中を優しくさすると。

彼女の体に、ナイフを突き刺した。

「ソ…ラ…？」

信じられないと言った顔で崩れ落ちる奈々。

彼女の白いワンピースから段々と赤い血が広がっていく。

「おやすみなさい、奈々」

崩れていく奈々を最後まで見ずに体を引きずって外へと出る。

もうどうでもいい、私を殺せないなら、奈々にも、この世界にも、もう用はない。

またいつものように適当に見て回って適当に死のう。そうすればどうせまた、彼が死んだあの日に戻るのだから。

『あなた、生きてないのに旅してるみたいね』

『人でなくなり、他の何にもなれなかったものは…簡単に死ぬことすらもできなくなる』

体を引きずるようにして暗い夜道を歩いていると、昔、誰かから言われたことと、誰かへと言った言葉が聞こえてきた気がした。

ふと、思い出してゆっくりとポケットを探る。最後の1個の飴玉、食べずに残していたのだけれど今食べよう。

「あっ……」

そのまま震える手で包み紙をはがしてから口元へと運ぼうとしたら、気を抜いたせいで飴を落としてしまった。

慌てて地面に落ちた飴を探す。アレが最後の一個だったのに……それにしても暗い……なんでこんなに……

「ああ、そっか……」

そう思って空を見上ると、今日が暗い理由がわかった。

「今日は……新月だっけ……」

飴は、まだ見つからない。

月はグルグル回り続けている（後書き）

おまけ

でーん！おまけは消されてしまった

最後までお付き合いいただきありがとうございます

以下海月の裏話などが流れます

どうでもいいよ！って方は戻ってください

いいのね？

本当にいいのね？

はい、残っている人は読む人と考えました

長いから覚悟しろよ！

以下友人から来たわかりにくかった点を作者が答えるよ！

どうでもいい人はスクロールスクロール！

Q・「新月の関係は？あと何で奈々が変貌したの？」

A・「満月で魔力が強まるなら新月で弱まるんじゃない！？って言

う考えで新月になりました。

ちなみに普段の奈々は魅了の魔術が掛かっている状態だと思っ
てく
ださい

新月だと解けるだけです

ちなみに記憶はちゃんとあるのでラストにああなりました」

Q・「ソラは何で楽しく旅してたの？」

A・「色々なことを教えるなら楽しく旅をしたほうが効率がいいか
らです

好きな人に教えて貰うのと嫌いな人に教えて貰うのとじゃかなり
違うと思いませんか？

教える理由としては奈々は素質があるだけなので色々教えてかな
いと…ということでしょうか

ちなみにソラは奈々を嫌ってませんからそれも楽しく旅する理由
に含まれてます」

Q・「何で一緒に生きるって言う選択肢があつたの？」

A・「奈々は新月の度に戻ってバトルしてます。そのときに殺せる
ならそれでよし、殺せないならまた一緒に旅して強くするとい
うこ
とです

ちなみにソラを殺しても奈々は死にません。ああ言ったのは自分
を殺せば楽になれるって思わせたかっただけです

ソラは奈々を嫌ってません。死にたかっただけですから」

デデーン！

完結に伴い裏話削除

新月からその後の満月まで（前書き）

Q：「昨日完結してなかった？」

A：「4月1日、何の日か知ってる？」

続きです

人物表

ソラ

旅人 魔法使い？

奈々

旅人 剣士？

エウナ

吸血鬼 他作品の主人公

来夢

人間 くらげって可愛いですよね！のヒロイン？

メリーさん

幽霊 エウナの親友

新月からその後の満月まで

「ソ…ソラ…?」

ソラにナイフを刺されたとき、驚きの中で納得している自分が居た。

「おやすみなさい、奈々」

彼女は倒れる私に向かって最後にそう言うと外へと行ってしまふ。着いて行きたいのに…どうも傷が深いのかそれとも他に理由があるのか、私の体はびくりとも動かない。ああ…私このまま死ぬんだろうな…。

「あ…生きてる?」

「エウナさん、ホントに助けるんですか?私としては少し遠慮したい気分なんですけど…」

「五月蠅いわよメリー、いいからさっさと治療しなさい」

「…エウナさんがそういうなら仕方ないですか」

薄れていく意識の中で、誰かと誰かが言い合うような声が聞こえた気がした。

「今日は…新月だっけ…」

飴は、まだ見つからない。

「ボクのでよければ飴をプレゼントフォーユー？」
「…」

落ちてしまった飴を探していると、私の目の前に小さな手が差し出された。…今の声は、忘れもしない…。

ゆっくりと顔を上げると、そこにはいつか一緒に過ごした少女の姿。サイドだけが長い黒い髪に私と同じ赤いコート、そしてコートの下には同じく赤いワンピース。生きてたのね…来夢。

「…あにやた、生きてたのね」

「…」
「…」

お互いに沈黙する。

「…お姉さん、あの薬使ったんですか…」
「…」

私は彼女の言葉を最後まで聴かずに頭を抱えれば、頭にはアレからもつおなじみとにやっただふさふさの耳の感覚。油断してた…完全にやあつてにやいの忘れてた…

「えつと…お姉さん？解呪の方法は…？」
「…失敗した」
「ありゃー」

どこか生暖かい視線で微笑んでくる来夢へと返事をする。

春のにやにや草を集めたところまではよかった！そこまではよかつたのだが…問題はその後起こった。

要は誰も作り方をしらにやかったのである。その結果として驚くと未だに猫耳とにやがにやにやるのは変わらずに…。

どうせ死ねば戻ると思っただけで放置してたのが仇とにやったにや…。おまけに半端に解呪したせいで手が付けられにやくにやった。幸いというかにやんというか、時間が経てば戻るのだけれど。

「それはそれは、ご愁傷様です」

その顔をやめにやさしい、微笑むにや。

「…君はどうかできにやいの？」

「出来なくはないと思いますけど…」

彼女はそこでちょっと悩むと、笑顔で両手を上げて招き猫みたいなポーズを取った。…にやにそのポーズ？私に対するあてつけ？喧嘩売ってるの？

「にやんにやん」

「っ…二度と喋れにやくしてやる…」

その言葉を聞いた瞬間、強化符を発動させて彼女へと駆け出す。今更ながら武器をにやにやに壊されたのが痛い…。

彼女も彼女で向かってくる私を少し避けると山道へと逃げていった。

譲れにやい戦いが、ここにはある。

「ぜえ…ぜえ」

「はあ…はあ」

力尽きた私たちは何処かの広場で二人、肩で息をしにやがら寝転がる。

「さつさと…捕まりにやさいよ…」

「い…嫌…ですよ…」

もう息も絶え絶えな上に呪いはまだ解けてない、もしも今襲われたら無抵抗で殺される自信があるね。

「それにしても…あなた…まだその魔法使ってたのね…」

「アレ…やっぱりばれちゃいましたか…」

「当然よ…君が…私から逃げられるわけ…にやいじゃにやい…」

「それも…そうですか…」

体力を回復させるまで暇にやので、彼女とおしゃべりを始める。

凍らせる魔法、彼女が使うとリスクとメリットがバカににやってにやいバカみたいにや魔法。

「これは…氷華ちゃんの…形見みたいな物ですからね…簡単には忘れないですよ…」

「そう…」

狐のお面を軽くにやでながら返事をする。気持ちは…わからにやくもにやいわね。

「それで？私をわざわざにやにやから離れたのにはどんな意図があるわけ？」

「むむ…そこまではねてましたか…」

もう息も落ち着いたので普通に喋る。普通に…喋りたい…。

「当然じゃにゃい。だって私はあにゃたの師匠よ」

「それもそうですかー。まあ、ばれていたなら隠す必要もないですね。彼女には生きて貰います」

「そう…勝手にしにゃさい」

別ににゃにゃが生きていようが死んでいようが、もう私には関係はにゃいのみだから。

「ねえ、お姉さん？」

「…にゃにゃに？」

突然、彼女は真剣にゃ顔で私の方を向いたので、私もおにゃじく彼女のほうを見る。

やがてその視線は上へとそれていき…。

「…何処を、見てるの？」

「…にゃんにゃん」

鬼ごっここの第2回戦が始まった。

「ぜえ…ぜえ…」

「はあ…はあ…」

2回目も決着は着かずに、力尽きた私たちはさっきと同じ広場に居た。

「あにやた…いい加減諦めなさいよ…」
「嫌…ですよ…」

体が冷え切って動けにやい彼女のために焚き火を起こしにやがら
そういう。今度の回復は私のが早いわね。

「はい、飴スープ。どうせ焚き火程度じゃ暖まらにやいんでしょ
う？」

「…これはこれもどうもありがとうございます」

彼女へと飴と水を入れて暖めたコップを渡してあげる。

それにしても使いすぎると動けにやくにやるって…相変わらずに
やんぎな魔法ねえ。ちにやみに飴は彼女持参のもの。私も口に入れ
て転がしてる。

「で？にやんでわざわざ私のところに来たわけ？にやにやを助ける
だけにやら私のとこまで来る必要はにやいでしょう？」

「師匠と弟子の感動の再会…ってことじゃダメですか？」

「ダウト。つくならもつとマシにや嘘にしにやさい」

「それは残念」

それきり彼女は黙ってしまったので、私も黙って火を見つめる。

「死ぬ方法、知りたいですか？」

彼女がそう言った瞬間、私は彼女を押し倒してその細い首を片手
で締め上げていた。

カランカラン、と彼女の持ったコップが落ちる音がする。

「痛いですって！首絞まってます！色々絞まってる！」

「早く、教えにゃさい」

絞めてにゃい方の手で拳を作りにゃがら嬉しそうに騒ぐ彼女へと問いただす。死ぬ方法…それがわかればもう、私は…！

彼女は首が絞められているのにも関わらず笑顔で私のほうを見つめ返すと…。

「にゃんにゃん」

…っ！こいつはこの期に及んで…！

新月の夜に、打撃音が響いた。

ソラが何処かへと行ってから意識を失った後、私は誰かが話す声で少しだけ意識が戻った。

「それにしてもエウナさん、私の方に付いてていいんですかー？あ、ソレ取ってください」

「はい。どういう意味？」

「んー…明らかにこの子よりもあっちの彼女のほうが危ないじゃないですかー。そんな人と来夢ちゃんを二人つきりにさせるんだ何て

…あ、今度はその包帯」

「あの子が言うんだからしょうがないでしょ…包帯ってどの包帯よ。多すぎ」

「へー…意外と放任主義なんですねー。右から3番目の奴です」

「はい。過保護になってもしょうがないでしょ…それにしても何時終わるの？」

「それもそうですかー…治療はそろそろですね。打撃の後とかは浅

いんですが…ナイフの刺し傷が酷くて…どうやったらこの子をこんな風にできるんでしょうねー？」

その先は何を言っていたのかわからなくなり、私の意識はもう一度闇に閉ざされた。

「…当てないんですね」

彼女の頭の横に私の拳がめり込んでいる。

「…当てたら死んじゃうでしょ」

本気で打ちすぎたのか、私の手からは血が流れており。さらに激痛を訴えてくる。どうやら猫耳も元へと戻ったようだ。

「で？死ぬ方法っていうのは？」

彼女の首から手を離しながら笑顔で聞く。

「その前に手、見せてください。折れてますよ」

「ん…？」

見ると私の手首から先はどこか変な方向を向いていた。

「死ぬ方法ですが…」

私の手に即席の包帯を巻きながら来夢が言う。お互いにコートは譲らなかったので、仕方なく私の着物の裾を切り取って代用してい

る。

「簡単に言えば生きることですね」

「…もつと詳しく」

「つまり、お姉さんはもう死んでいるから死ねないんです」

「…だから、生きればいいと？」

何だ…そんなことか…。

「それは無理ね」

包帯を巻いている彼女へと静かに告げる。

「私はもう元には戻れない」

壊れたものは戻らない。それはあなたもわかっているでしょう？
来夢。

「だから私には…あなたの言うことは出来ないわよ」

最後に彼女へと告げると、立ち上がる。その際に巻き途中の包帯が解けたが気にしない。その程度の情報しかないなら、もうここに居る意味は無い。

「それじゃね、来夢。久しぶりに会えて楽しかったわ」

来夢から背を向けると歩き始める。もう、あなたとは会わないことを祈ってるわ。

「お姉さん、一人なら無理ですが…二人ならどうなんですか？」

去り際に彼女が声を掛けてきたので立ち止まる。

「少なくともお姉さんには一人だけお姉さんのことを覚えていて、一緒にいてくれる人が居るんじゃないですか？」

なるほど…ね。彼女がここに居て奈々を助けた理由がわかった。

「その人と、一緒に生きてみる気はないですか？」

彼女は…来夢と一緒に生きる人を見つけたのか…。

私は彼女の視線を背中に受けながら空を見上げる。ああもう、本当に…。

「変わったわね…君は」

「そういうお姉さんは変わらないですね」

やっぱり、君と私は似ているだけで違う。優しすぎるのよ、君は。

「…大切にしなさい？」

「言われなくても、死んでも手放しませんよ」

だから、私は君じゃなくて奈々を選んだのよ。

「やっぱり私はあなたが嫌いよ。」

「そうですか、やっぱりボクはお姉さんが好きですよ」

だって、お姉さんはボクの名前を覚えてくれてる唯一の人ですか。^{ら。}

歩き始めた私の背中へと、彼女の呟くような言葉が聞こえてきた。

「ホントに行くの？」

「うん、やっぱり私にはソラを放っておけないから…」

「そう…」

何処かのお屋敷の前で私は、お世話になった人たち？へとお辞儀をする。

いまいち意識がはつきりしていなかったのだけれど、どうやら私は彼女たちに助けられたらしい。

しかし助けられるだけではなく、彼女たちは私のリハビリやら今まで住む場所まで提供してくれた。

どうしてそこまでするのかと理由を聞くと、途中で投げ出すのは気が引けるそうだ。

その言葉を聞いたとき、何となく…本当に何となくだけ彼女が他の人たちに好かれてる理由がわかったような気がする。

そんなわけで今日は新しい旅立ちの日。ソラとは何としても一度会って話さないと私の気が治まらない！

幸い、旅の仕方はソラに教えて貰っている。つまり探するための準備は万全。

「まあ、長い道のりになるかも知れないけど、気をつけていってらっしゃい」

「諦めたら何時帰ってきてもいいですからねー」

「メリー！縁起でもないこと言うんじゃないの」

「大丈夫！何としても見つけてみせるから！」

「愛ですね…素敵です…ところでエウナさん、私への愛が足りないと思っんですがどうでしょう？」

「そう、がんばってね」

「…スルーですか？で、でもそんなエウナさんも…」

「成仏しろ」

「…エウナさんが冷たい」

私は二人で騒ぎ始める彼女たちへと笑いかけてから歩き始める。

屋敷にはもう一人、ソラに似た子が居ただけけれど…最初に少しだけ話したつきりあんまし話さなかった。

今でも彼女はエウナさんの背中ですやすやと眠っている様子。

それにしても…あの子はいつたい何なんだろう？

ソラが掛けた魔法をあっさり解いてたし…すごい不思議な子だったな…。

「あちゃー…またか」

どこかの森の中で私は一人呟く。

私の体には全身にツタのようなものが絡まっており、身動きが出来ずに運ばれていくことまであの時と一緒に。違うのはここに奈々は居ない、ということと私には生きる意志がほとんどないということかしらねえ？

「どなどなどーなーどーな…」

相変わらずすることもないので一人呟く。さあ、あの時は食べられてあげなかつたけれど、今度はおいしく食べられてあげちゃうぞ！

私がぼけーっと運ばれていると、突然ツタの動きが止まった。むむー？

見るとツタに糸のようなものが絡み付いて動きを止めている様子。

あー…そう。

そして、駆け込んで来てツタを切る小さな影。悪いな！おいしく食べられるって言ったけれど、ソレは無理だったみたいだ！無かったことにして頂戴。

何と、なすすべなく私が地面に落ちるところまであの時と一緒に…痛いからここは一緒にじゃなくてもよかったですただけだな！。

「助けるなら捕まってる人のことも考慮した方法で、って言わなかったっけ？」

大剣で植物にとどめを刺している彼女へと声をかける。幸い、あんまし驚かなかったので猫耳は出なかった。よかった…。

「あんなのに捕まるのが悪いのよ…」

するとどこか飽きれながら返事をされた。あんなのとは何だ、植物をバカにしちゃいけないんだぞ！

「久しぶりね、奈々。傷はどう？」

「久しぶり、ソラ。見事に完治したからご心配なく」

あの子、ホントのことだったのねえ…。それにしてもアレを治せるとは驚き。

彼女は私に振り向くと、大剣を向けた。

「今からあなたに選ばせてあげる」

どこか楽しそうに、どこか嬉しそうに彼女は言う。

「私と一緒に生きるか、それともずっとどこかで監禁状態になるか」「それはまた、すごい2択ね…」

…選択肢ないじゃない。

「死のうとしても、私が助けるから無意味だからね？今となってはソラより私の強い、つまりあなたに選択肢は用意されてない！」
「わお…」

嬉しそうにそう言う彼女の様子に、空を見上げて少し悩む。思い出されるのは新月の夜の彼女の言葉。

「それなら、一緒に行きましょうか」

「ホント!？」

「あ、それと」

喜ぶ奈々へと視線を戻しながら言う。

「君は少し身の程を知ってればいいと思うよ」

まだ、あなたが私より強いわけじゃない。

「…それじゃ、ソラはまだ私に教える必要があるってことだよね！」

「？」

「あ…」

そういえばそういう約束だった。

「いいわよ。色々教えてあげる。面白いものもつまらないことも…
色々、ね」

いいでしょう。成功したら儲けもんだし…もし失敗したらまた繰

り返せばいいだけなんだし。

それなら、彼女に付き合つのも悪くないわねえ。

そう結論付けると奈々と一緒に歩き始める。

「ねえソラー？」

「んー？んぐつ？」

突然、彼女は私の名前を呼ぶと口を塞いできた。そしてゆっくりと飴玉がゆそーされる。当然、驚いた私にひよこんと生えてくる猫の耳。にゃ…にゃー!?

「にゃ…にゃにを!？」

「ふふ、助けた後のご褒美。確か飴もだよね？」

にゃにゃは真っ赤な顔でそう言つと嬉しそうに手をつにゃいで来た。

さてさて、この手が離されるのは何時ににやるのやら…。

新月からその後の満月まで（後書き）

と、いうことで無事完結となりました。

釣られた方もつられなかった方も

最後までお付き合いいただきありがとうございます
少しでも楽しんでいただけたら幸いです

さて、次は何を書こうかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9458r/>

空を見上げて歩いてこう

2011年9月3日22時47分発行